ふるさと読本

わたしたちの黒石 第８集

旧石器時代・縄文時代・弥生時代

花巻遺跡

公益財団法人 黒石市民財団

刊行のことば

「わたしたちの黒石」は、平成十一年三月に第一集を発刊して以来、これまで黒石の歴史と文化や産業について第七集まで発刊してまいりました。

青森県内には、数多くの遺跡があり、発掘されています。なかでも三内丸山遺跡は国内最大級の縄文集落跡といわれており、今から五九〇〇年から四二〇〇年前の縄文時代に生きた人たちの当時の自然環境や生活の様子などを知ることができる遺物が多く出土しております。

黒石にも縄文時代の遺跡が、百三十二カ所あると言われていますが、発掘調査が行われた遺跡は少なく、調査も小規模なものでした。今後、大規模な全容を知るような発掘が進んでいけば貴重な遺物が出土することも期待できると考えられます。

二〇二一年七月には、三内丸山遺跡を含む十七カ所の遺跡が「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録されましたが、縄文時代の関

心はますます高まりつつあります。このようなときに本書を読むことにより、黒石市内にある遺跡に目を向け、興味関心を持つきっかけになることに繋がってほしいと願っております。

今回の発刊にあたり、黒石市教育委員会文化スポーツ課黒石市歴史文化専門員の鈴木徹氏には、公務多忙にもかかわらず、執筆を引き受けてくれたことに対しまして、心から感謝申し上げます。

公益財団法人　黒石市民財団

編集委員長　大　沢　潤　逸

―目次―

第一章　はじめに

一　どうして私たちは歴史を学ぶのか　……1

二　歴史区分　……4

三　黒石の地名　……6

四　自然環境・黒石の地形

（一）　黒石市の沿革　……7

（二）　黒石市の位置　……9

（三）　黒石市の山　……11

（四）　黒石市の川　……13

五　黒石の遺跡　……16

第二章　旧石器時代

一　旧石器時代　……21

二　青森県の旧石器時代　……25

第三章　縄文時代

一　縄文時代のはじまり……32
二　縄文時代のくらし……33
（一）縄文時代の食事……34
（二）縄文時代の住まい……39
（三）縄文時代のいろいろな道具……42
（四）縄文時代の祭祀……46
（五）環状列石……47
（六）縄文時代のヒト……49
三　黒石市内の縄文時代の遺跡
（一）はじめに……57
（二）花巻遺跡……57
（三）一ノ渡遺跡……70
（四）石名坂遺跡……74
（五）長坂（一）遺跡……77

第四章　弥生時代

一　弥生時代とは……83
二　弥生時代のくらし……92
（一）　弥生時代の食事……92
（二）　弥生時代のムラ……94
（三）　弥生時代のいろいろな道具……98
（四）　弥生時代の祭祀……100
（五）　弥生人……104
三　青森県の弥生時代
（一）　青森県の弥生時代……105
（二）　垂柳遺跡……107
（三）　砂沢遺跡……110
（四）　黒石の弥生時代……112
四　弥生文化の伝播……113

写真・図版出典一覧……116
参考文献一覧……120
協力機関及び協力者一覧……121

第一章　はじめに

一　どうして私たちは歴史を学ぶのか

私たちは、どうして歴史を学ぶのでしょうか。

英国の歴史学者であるエドワード・ハレット・カーの『歴史とは何か』という著書（写真1）の中に「歴史とは現在と過去との絶え間ない対話である。」という有名な言葉があります。私たちは色々な場所でこの言葉を耳にし、また、この言葉が引用されているのを目にすることがあります（註一）。歴史を学ぶということは、未来あるいは将来の予測をするときに、過去の出来事を振り返ることから始まります。

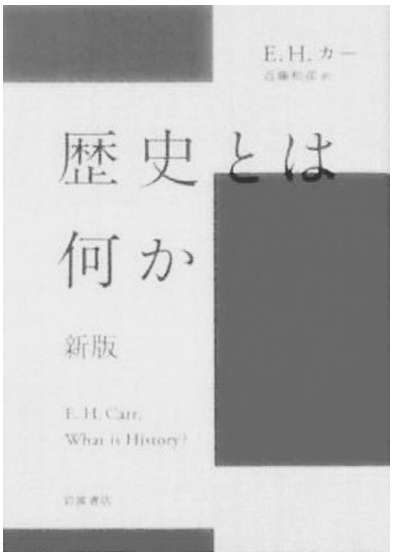

写真1　E・H・カー著『歴史とは何か』

長い歴史の中には、さまざまな出来事がありました。その出来事がなぜ起きたのか、その出来事が起きた原因や理由を考え、それを現在やこれからの黒石の未来に活かすことが大切です。温故知新（註二）という言葉があ

るように、現在の私たちは、過去の人々の失敗や知恵から学ぶことが多く、それが歴史を学ぶことの意義でもあります。

イタリアの哲学者ベネデット・クローチェ（註三）も、「歴史の本質は、過去を現代の目で見る、そして、現代の諸問題に照らし合わせて見ることであり、・・・歴史家の仕事は記録することではなく、評価することである。・・・そして全ての歴史は「現代史」である。」と唱えています。

歴史を学ぶためには、昔の出来事を知るだけでなく、過去の人々の生き方やその人々がどのように関わり合ったのかということについても知る必要があります。その中には、人々が築き、受け継いできた伝統や文化、宗教、人権や平和に関する事柄も数多くあり、次の世代に生きていく人々がそれらを受け継ぎ、そして次の世代へと伝えていかなければなりません。

黒石は歴史と文化の町です。そしてこのような魅力ある町は、黒石に住み続けた人々の努力と英知の積み重ねの上に成り立ったのです。

また、将来の黒石を考える上でも、黒石の歴史を学ぶことは、とても大切なことであると考えます。

歴史を学ぶ意味は、私たちと違う時代に生きた人々に出会うことを通し

て、自分自身を理解することでもあります。黒石の各時代には、さまざま文化を持つ人々が生活しており、彼らのものの見方・考え方は、今日の私たちと大きく異なる面もありました。

また、黒石は、周辺の地域から深い影響（えいきょう）を受けながら歴史を形成してきました。私たちは、周辺地域の世界を知ることによって黒石のこともよく知ることができます。黒石のことしか知らないと、実は黒石のこともよく理解することができません。黒石の歴史の中で生きてきた人々を学ぶことにより、津軽の歴史や東北の歴史も学ぶことができ、日本や世界の歴史も知ることができるようになります。

現代の社会は、地球温暖化による環境の変化や少子化、高齢者社会など、さまざまな問題に直面しています。過去の過ちを繰り返すことなく、互いに相手を尊重しながら、黒石のみならず、津軽地域、青森県、東北地方、そして全国の人々と協力して黒石の未来を切り開いてゆくために、市民財団ふるさと読本『わたしたちの黒石』が役立つことを願っています。

註釈

註一　一九六一年にケンブリッジ大学で行ったジョージ・M・トレベリアンに関する講

演に基づいた『歴史とは何か』（E・H・カー著　清水幾太郎訳　一九六七年初版　二〇一四年改訂　岩波新書　岩波書店）、『歴史とは何か　新版』（E・H・カー著　近藤和彦訳　二〇二二年初版　岩波書店）という著書の中に記述されています。

註二　温故知新は、論語の「故（ふる）きを温（たず）ね新しきを知る、以て師と為る可し（古い事柄も新しい物事もよく知っていて初めての人の師となるにふさわしい意）」に由来するものです。昔の物事を学びなおし研究して、そこから新しい見解や知識を得るということです。

註三　ベネデット・クローチェは、イタリアの哲学者であり、歴史学者です。イタリアのみならず、欧米の思想界に大きな影響を与えました。代表作は、『表現の科学および一般言語学としての美学』、『思考としての歴史と行動としての歴史』などがあります。「すべての歴史は現代史である」というよく知られている言葉があります。

二　歴史区分

日本の歴史は、「原始（げんし）・古代（こだい）・中世（ちゅうせい）・近世（きんせい）・近代（きんだい）・現在（げんざい）」という歴史区分がこれまで使用されてきました。しかし、近年、「原始（げんし）」という言葉には、野蛮（やばん）、未開（みかい）という意味が含まれることから先史時代（せんしじだい）と言う言葉に置き替えて使われるようになりました。ですから、地球上の歴史で人類が出現してから文字を使うようになるまでの期間を先史時代（せんしじだい）と言います。

ところが、日本で出版されている一般的な歴史書や教科書では、先史時代という区分ではなく、さらに細かく旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代という言葉を歴史区分で使用しています。

文字による記録が始まると天皇を基軸とした政治機構の所在地から、飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・安土桃山時代・江戸時代と分けています。さらにこれを補うため古墳時代後期から飛鳥時代前期に大和時代、鎌倉時代の後に建武の新政、室町時代前期に南北朝時代、室町時代後期に戦国時代、江戸時代後期に幕末という区分を使用しています。

江戸時代以降、近代と現代については、明治時代・大正時代・昭和時代・平成時代・令和時代と呼ばれ、現在に至っています。

市民財団ふるさと読本『わたしたちの黒石』では、一般的な歴史書や教科書などで使用されている時代区分を用いて説明していきます。必要に応じて大和時代、建武の新政、南北朝時代、戦国時代、幕末という言葉も使用することもあります。

写真２　黒石城跡・崖上に黒石城が立地

三　黒石の地名

黒石の地名の由来については、諸説があります。一つは、黒石は蝦夷の住むところが久慈須とか國栖などと呼ばれていたことから、「クジス」あるいは「クニス」が、「クロイシ」に転訛したという説です。

もう一つの説は、黒石稲荷神社の由来書、「受持神社由来」によれば、「幅二〇間、深さ四間の狐穴の隣に大きな石があり、その上に三尺四面の御堂が建立されていた。」と書かれており、この石が黒い石であったため、「黒石稲荷」と呼ぶという伝承があります。これが黒石の地名と関わりがあるのではないかとも考えられています。

さらに、黒石の「クロ」という言葉の語源は、

小高くなった地形、崩壊した地形、浸食された地形などを表す言葉として使われています。また、「イシ」の語源は、断崖絶壁の山から崩れ落ちる土砂、岩石の多い波打ち際などの意味があり、このことから、「クロイシ」は、長く続いた小高い土地の上（写真2）にできたムラなので黒石と呼ばれたのではないかとも考えられています。

黒石という地名の由来についてどの説が正しいか、今のところはわかっていません。

四　自然環境・黒石の地形

図1　津軽信英肖像画（正伝寺所蔵）

（一）　黒石市の沿革

明暦二年（一六五六）に藩祖津軽十郎左衛門信英（図1）が弘前藩から五千石を分け与えられて分知され、黒石領（註一）が創立されました。その後、文化六年（一八〇九）四月五日には、一万石で黒石藩（註二）が成立

します。明治時代以降になると、南津軽郡黒石町となり、郡役所が建てられ、政治、経済、文化の中心として栄えていきました。

昭和二十九年七月一日、南津軽郡の黒石町、中郷村、六郷村、山形村、浅瀬石村が合併し、青森県内で四番目の市制が施行され、黒石市が誕生しました。また、昭和三十一年十月一日には、境界変更により、旧尾上町の追子野木、久米、長崎が加わり、現在の黒石市になりました。

註釈

註一　津軽信英が分知を受けた領地は弘前藩領四万七千石のうち五千石でした。五千石は、黒石領分二千石、平内領分一千石、上州領分（群馬県新田町、現在は群馬県太田市）二千石に分けられていました。分知された領地が一万石に満たなかったため大名ではなく、旗本の身分でした。黒石領分の黒石村に黒石陣屋を設けたことから総称して「黒石領」と呼ばれるようになりました。そのため、津軽信英は、黒石初代領主になります。

註二　黒石六代領主津軽寧親は、寛政三年（一七九一）六月に弘前八代藩主津軽信明が急死したため、四万六千石を継いで弘前九代藩主になりました。文化二年（一八〇五）五月、津軽藩が、蝦夷地警備を担当した功績により幕府から領地高四万六千石が七万石になる栄誉を受けました。さらに、幕府は盛岡藩、弘前藩の両藩に東西蝦夷地の警備を命じ、その見返りに津軽藩を十万石に格上げさせました。この時、寧親から幕府へ、「知行四千石である黒石津軽家に六千石を与え、表高を一万石にすることにより蝦夷地と領内の警備にも役立つ」と上申しています。同

六年、幕府から寧親（やすちか）あてにお達しがあり、黒石津軽家の一万石大名昇進が決定し、「黒石藩（くろいしはん）」が誕生しました。初代の黒石初代藩主は、津軽親足（つがるちかたり）です。ちなみに、大名は一万石以上の領地を持つ者と定めたのは、第三代将軍徳川家光です。そのため、親足（ちかたり）は大名となり、黒石領から黒石藩になりました。

（二）　黒石市の位置

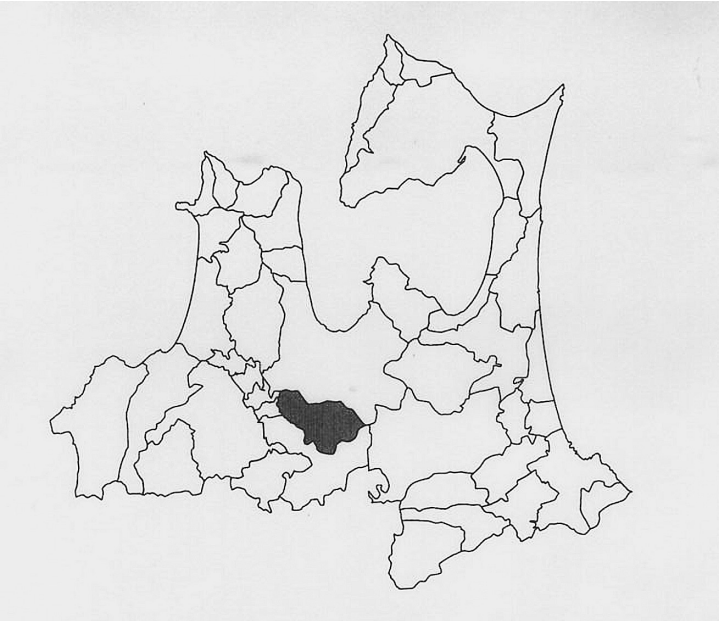

図２　黒石市の位置図

黒石市（図２）は、青森県のほぼ中央、おへその位置に当たり、東側に八甲田連峰（はっこうだれんぽう）、西側に津軽平野を望むことができます。中心地の位置（註一）は、北緯四十度三十八分三十四秒、東経百四十度三十五分四十秒、標高は五十二・四ｍです。

黒石市の形は、首が西を向いているヒョウタンの形をしています。規模は、東西の最長部分で二四・四二㎞、南北の最長部分で二〇・八三㎞、総面積は二一七・〇五㎢です。

黒石市の土地利用状況は、総面積の六二・一三％が山林地帯、四・一六％が宅地、一八・二

〇%が田畑です（註二）。

黒石市の地形は、東側の山地と西側の平野に分かれています。総面積の八割は、八甲田連峰に連なる山岳地帯に形成されている丘陵地が占めています。その丘陵地は、「黒石りんご」の産地になっています。また、津軽平野の一部となる平野部は良質な土壌に恵まれ、味の良い「黒石米」が作られています。そして、市街地は黒石市の南西部に位置しています。

また、黒石市内の南部を東西に流れている浅瀬石川流域の各所には、温泉がわき出ており、昭和三十三年十月に「黒石温泉郷県立自然公園」に指定されています。

註釈

註一　黒石市役所の位置で、住所は黒石市大字市ノ町十一番地一号です。

註二　「二〇二三年　市勢概要　くろいし」から黒石の規模、総面積、土地利用状況を記入しています。

（三）　黒石市の山

黒石市の東側は、八甲田連峰に連なる丘陵地が形成されています。そして、その丘陵地から、櫛ケ峯（標高千五百十六m）（写真3）や横岳（標高千

写真３　八甲田連峰・櫛ヶ峯

三百三十九ｍ）を頂点として南側に下岳（標高千三百四十二ｍ）、南沢岳（標高千百九十八ｍ）、毛無山（標高九百八十二ｍ）、雷山（標高六百三十六ｍ）、田代山（標高七百六十八ｍ）、富岡山（標高六百七ｍ）などの山々が連なっています。

また、北側には黒袋山（標高六百九十六ｍ）、上湯沢山（標高七百四十四ｍ）、二ツ森（標高七百四十八ｍ）、黒森山（標高六百九ｍ）などの山々が連なっています。

このうち、南八甲田連峰の櫛ヶ峯、横岳、下岳は黒石市に含まれます。そのため、黒石市で最も高い山は、櫛ヶ峯になります。

【補足説明：八甲田連峰】

八甲田連峰は、一般的には「八甲田山」と呼

写真４　八甲田連峰・大岳

ばれていますが、八甲田山という名前の山があるわけではありません。いくつかの山が連なっていることから「八甲田連峰」が正式名称です。

八甲田連峰の主峰は大岳（標高千五百八十五m）（写真４）です。別名、八甲田大岳とも呼ばれていますが、青森県の最高峰「岩木山（標高千六百二十五m）」に次ぐ高さです。八甲田連峰を形成している山々は、北部八甲田山系と南部八甲田山系に分かれています。

北部八甲田山系は、前嶽（標高千二百五十一m）、田茂萢岳（標高千三百二十四m）、赤倉岳（標高千五百四十八m）、井戸岳（標高千五百五十m）、高田大岳（標高千五百五十九m）、石倉岳（標高千二百二m）など一〇の山々からなっています。また、南部八甲田山系は、横岳（標高千三百三十九m）、猿倉岳（標高千三百五十四

写真５　浅瀬石川と岩木山

m）、櫛ケ峯（くしがみね）（標高千五百十七m）、乗鞍岳（のりくらだけ）（標高千四百五十m）など六つの山々からなっています。

（四）　黒石市の川

黒石市内を流れる主な川は、浅瀬石川（あせいしがわ）（写真５）と十川（とがわ）です。これらの川は、岩木川（いわきがわ）と合流し、日本海側へ流れていきます。

浅瀬石川は、黒石市内の南側を東西に流れる一級河川（いっきゅうかせん）です。黒石市内で、最も大きな川です。浅瀬石川は、岩木川の支流になっており、岩木川の支流では、平川に次いで二番めに大きな川です。

浅瀬石川は、古くは「汗石川（あせいしがわ）」とも書かれていました。その名前の由来には、八甲田山地からの土砂を多く運び、各所に石が転がる浅瀬（あさせ）を

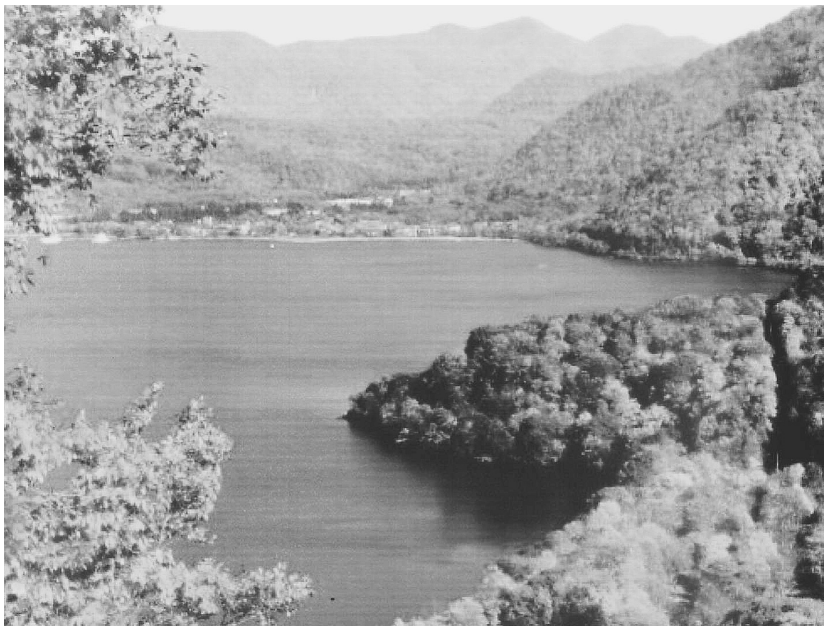

写真６　発荷峠展望台から十和田湖を展望・奥に八甲田連峰の横岳、櫛ヶ峰、駒ヶ峰

形成していることから「浅瀬石川」という名称が付いたという説があります。

浅瀬石川の源流域は、十和田湖の近くのカルデラ付近にあります。南八甲田連峰中の横岳（標高千三百三十九ｍ）、櫛ヶ峰（標高千五百十七ｍ）、駒ヶ峰（標高千四百十六ｍ）（写真６）の間を流れる渓流が平川市葛川付近で合流し、流路を北西に変え、浅瀬石川ダム付近で北方に向きを転じたあと、再び北西に流路をとっています。そして、板留付近から西北西に方向を変え、黒石市中心街の南側を通り、津軽平野に抜けた後、西方の藤崎町で南々東方から流れる平川と合流して岩木川につながります。浅瀬石川の支流には、中野川、二庄内川、青荷川などがあります。

十川は、黒森山および仮間沢に源を発し、黒石市の長谷沢を北側に流

写真７　岩木川

れ、上十川字東野添付近で長坂川と合流し、さらに高館川と本郷川が合流し、西側に方向を変え、藤崎町久井名館付近から北側に方向を変えます。そして板柳町館野越付近で浪岡川と合流し、北西側に向かって流れていき五所川原市元町地区にある五所川原大橋付近で岩木川と合流します。十川の支流には、高館川と長坂川があります。

【補足説明：岩木川】

岩木川（写真７）は、古くは「弘前川」や「大川」とも呼ばれていました。岩木川という名前は岩木山に由来します。岩木川の「イワキ」は、神が鎮座する「イワクラ」と同じく、霊山信仰に基づく言葉であると言われています。そのため、岩木川も岩木山と同様に神なる川として見られ

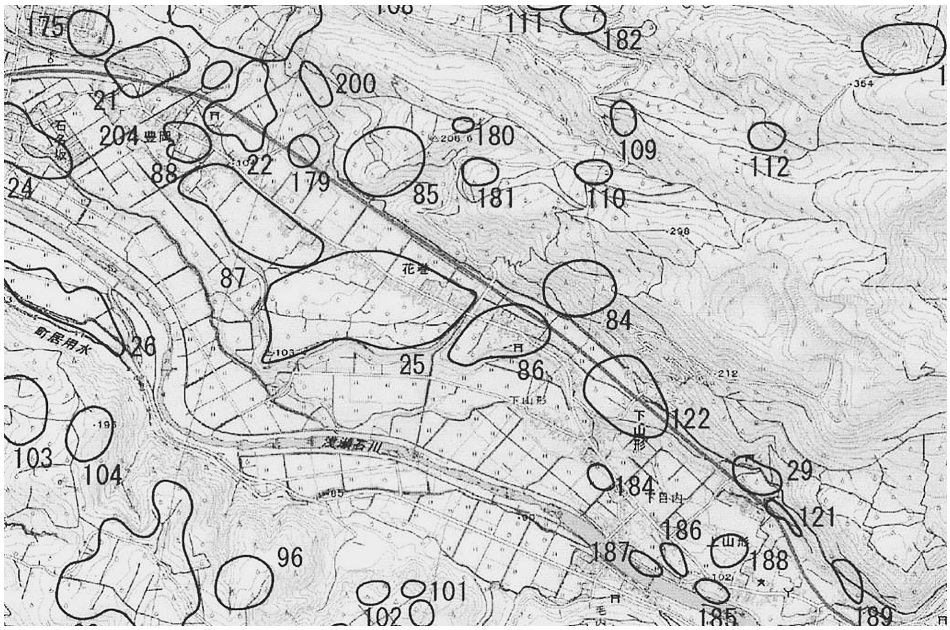

図３　黒石市山形地区遺跡分布地図

ていたと考えられます。

岩木川は、中津軽郡西目屋村にある世界遺産で有名な「白神山地」の雁森岳（標高九百八十七m）に源を発しています。そこを源流として津軽ダムを通り、弘前市で平川、五所川原市で十川と合流し、岩木山の南側のふもとを北東に流れています。そして、十三湖を形成した後に日本海に注いでいます。

五　黒石の遺跡（図３）

黒石市内には、現在百八十四ヶ所の遺跡が確認されています。これらの遺跡の大部分は、高舘地区、上十川地区、牡丹平地区、山形地区、南中野地区、厚目内地区に分布しています。これらの地区は、浅瀬石川の河岸段丘（註一）と八甲

田連峰の裾野に広がる地形であり、そのため比較的緩い傾斜地に遺跡が点在しています。

写真８　赤坂遺跡発掘調査風景

浅瀬石川は、山形地区では、標高百ｍの河岸段丘を形成しています。遺跡が所在する場所は、牡丹平段丘と呼ばれている河岸段丘で、自然環境が良いため、数多くの遺跡が確認されています。

遺跡の年代を見てみると、縄文時代の遺跡が百三十二ヶ所、奈良時代の遺跡四ヶ所、平安時代の遺跡が六十三ヶ所、中世の遺跡が十ヶ所あります。遺跡の数と遺跡の年代別の数が合わないのは、一つの遺跡でいくつかの年代が確認されることがあるからです。このような遺跡は複合遺跡と呼ばれています。黒石市では、三十二ヶ所の複合遺跡が確認されています。そして、これらの遺跡は、縄文時代と奈良・平安時

代の年代から成る遺跡が多いのが特徴です。

さて、百八十四ヶ所の遺跡のうち発掘調査を実施した遺跡は十六ヶ所です（写真8）。文字のない時代の歴史を知るために考古学という学問があります。考古学は、遺跡から発見された遺物（註二）や遺構（註三）を調べることによりその時代のヒト（註四）がどのような生活をしていたのか知るための学問です。遺跡はまた、埋蔵文化財包蔵地ともいうことがあります。そして、地中に埋蔵された文化財を掘り起こして遺物や遺構を調査することを発掘調査といいます。

昭和五十年代には、東北自動車道や浅瀬石川ダムの建設に伴い青森県埋蔵文化財調査センターが担当で、高館（一）遺跡、牡丹平南遺跡、浅瀬石遺跡、板留（二）遺跡、一ノ渡遺跡などの発掘調査が行われました。

昭和五十八年度には、黒石市教育委員会の中に青森県内では初めてという文化課ができました。その背景には、『黒石市史』の刊行と市内の文化財の保護対策があります。文化財の保護対策の中に遺跡の保護も含まれていました。

市内にある遺跡はまだそんなに開発されるようなことはありませんでし

たが、それでも農業の機械化に伴い、遺跡の保護対策が望まれるようになりました。このような状況のなかで、黒石市教育委員会では、昭和五十九年度から遺跡を保護するため、開発が計画されている遺跡について発掘調査を行うようになりました。黒石市教育委員会で発掘調査した遺跡の数は、十ヶ所です。黒石市内で発掘調査された遺物の一部は、黒石市産業会館の一階に展示されています。

註釈

註一　河岸段丘とは、河川の中流、下流域の流れに沿って発達した階段状の地形ことを言います。川の流れにより、土砂が溜ったり、地形が削り取られたり、さらに川底が隆起していく過程を繰り返して河岸段丘が形成されていきます。黒石市では、浅瀬石川の流れによって牡丹平地区から山形地区に形成された河岸段丘が牡丹平河岸段丘と呼ばれています。

註二　遺物とは、過去の人類が残した土器や石器のほかに、土製品、石製品、鉄製品、骨製品、陶磁器、動物遺体、植物遺体などが動産的（動かすことができるもの）なものを遺物と言います。遺物には、人工遺物と自然的遺物があります。そして過去より伝わり現在は使われなかったものを遺物と言います。

註三　遺構とは、人類によって造られた過去の建物を含めた構造物が、後の時代まで残されたものを遺構と言います。本文中に挙げているように遺構と呼ばれているものは、住居跡、土坑跡、土坑墓跡、陥し穴跡、水田跡、工房跡、配石遺構などがあります。わかりやすく言えば、発掘調査で発見された不動産的なものが遺構

です。

註四　「ヒト」という言葉は、生物種として指すときに使用します。考古学、人類学、生物学などではよく使われています表記です。知性や道徳心、社会的な面が含まれる場合には、「人」と表記されると考えています。そのため、「ふるさと読本第八集　わたしたちの黒石―旧石器・縄文・弥生―」では、主に「ヒト」という表記をしています。

第二章　旧石器時代

一　旧石器時代

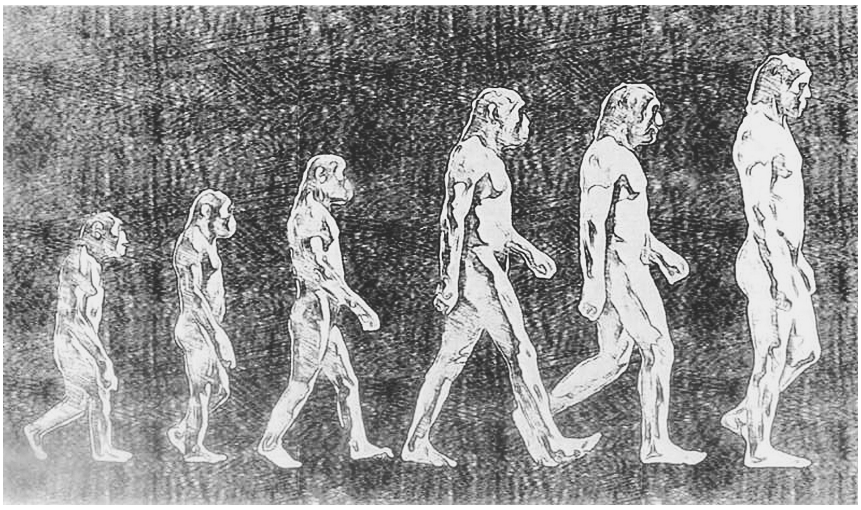

図４　人類の進化

縄文時代の前の時代を、旧石器時代と言います。

最も古い人類は、今から七〇〇万年前にアフリカ大陸に誕生しました。この人類は、猿人と呼ばれ、直立二足歩行をしており打製石器を使用し動物を狩り、木の実を採集して生活をしていました（図４）。

今から二五〇万年前には、地球は氷河時代に入り、寒冷化が進み、陸地の約三分の一が氷に覆われていました。この時期を氷期と言います。また、氷期と氷期の間に比較的暖かい時期があり、この時期を間氷期と言います。氷河時代は、この氷期と間氷期が繰り返されてきました。この時代の人類は、原人と呼ばれています。原人たちも打製石器を使用していますが、猿人

との違いは、寒い環境を生き抜くために原人が火を使用することを覚えたことです。

さらに、六〇万年前には、進化した旧人が現れます。旧人は、死者を埋葬するなど精神文化を発達させました。二〇万年前には、アフリカで新人が現れ、世界中に広がりました。この新人のことをホモ・サピエンスと言います。新人は、私たちの直接の祖先と考えられています。彼ら新人たちも打製石器を改良しながら使用しているだけでなく、優れた洞窟絵画（図5・註一）も残しています。新人は、アフリカから移動して世界の各地に住むようになりました。

猿人から新人まで打製石器を使用し、狩猟採集しながら生活していた時代を旧石器時代と言います。

図5　ラスコーの洞窟壁画・イメージ画

それでは、日本ではいつ頃から旧石器時代が始まったのでしょうか。

一九七〇年代から宮城県を中心とした東北地方や北海道、関東地方の各

地から十万年前、あるいは数十万年前の前期・中期旧石器の遺跡が発見されました。しかし、平成十二年にそれらすべてがねつ造であることが判明しました(註二)。それ以降、旧石器時代の見直しが行われています。

写真9　青森の「ヒバ」

日本列島の人類の出現は、今から四万年以上前に大陸から人類が海を渡り、移住してきたと言われているため、日本の旧石器時代が始まったのが今から四万年前とされています。縄文時代は、一般的には今から一万二〇〇〇年前に始まっていますので、旧石器時代は二万八〇〇〇年続いたことになります。

地球の最後の氷河期は今から約二万年前が最盛期でしたが、その後地球は温暖化に向かいました。これまで日本列島は針葉樹林(写真9・註三)が多く繁っていましたが、西南日本から太平洋沿岸に落葉広葉樹林(註四)が拡がり、北海道を除いた日本列島が落葉広葉樹林と照葉樹林(註五)

で覆われるようになりました。温暖化は植生の変化も生じるようになり、その結果、約一万年前には日本列島からマンモスやトナカイなどの大型哺乳動物がほぼ絶滅してしまいます。

旧石器時代の人々は、打製石器を使用し動物を捕まえ、木の実を採集して生活していました。また、集落は小集団で、頻繁に移動生活を繰り返しながら生活を営んでいたと考えられています。

註釈

註一　ラスコーの洞窟壁画が最も知られている絵です。日本では、旧石器時代の絵画はまだ発見されていません。

註二　昭和五十年代に宮城県の旧石器研究グループ「石器文化懇話会」にアマチュア考古学研究家が参加しました。この会は東北大学を中心とした発掘調査チームを結成し、旧石器の発掘を行ってきました。アマチュア考古学研究家は、期待されるような石器や古い年代の土層から石器を発見していたため、「神の手」と呼ばれるようになりました。しかし、平成十二年（二〇〇〇）に自ら埋めておいた石器を自ら掘り出したことが発覚したことから、旧石器時代の年代の見直しをはじめ、国史跡に指定された遺跡の指定解除、教科書の書き直しなどかなり大きな影響がありました。このことは、旧石器ねつ造事件と言われており、旧石器時代の調査が行われているところです。

註三　針葉樹林とは、針のように細く尖った葉を有する樹木のことを言います。マツ、ヒノキ、スギ、サワラ、イチイなどが針葉樹になります。針葉樹の特徴は、常緑

であること、松ぼっくりのような球果を付けるものが多いことです。

註四　落葉広葉樹林とは、乾燥の季節や寒い時期に全ての葉を落とす広葉樹の森林のことを言います。広葉樹の特色は、葉が広くて平たい形をしており、幹は太くて曲がりながら育ちます。樹木の表面は比較的粗いという特色もあります。代表的な広葉樹としてカツラ、キリ、ケヤキ、サクラ、ブナ、ナラなどがあります。

註五　照葉樹林とは、気候が温帯の地域にできる常緑広葉樹の森林のことを言います。常緑広葉樹とは、落葉しない樹々のことで、太い幹に水や栄養を蓄えて、葉を広げて光合成を行います。葉は平たくて薄いのが特徴です。照葉樹林は、西日本を中心に広く分布しており、主な樹々としては、シイ、カシ、ツバキなどがあります。日本から東アジアに広がる地域には、照葉樹林から成る木の実や根菜などを利用した大豆発酵をはじめ、自然発酵、あく抜きして食べる食物が豊富にあることから「照葉樹林文化」と呼ばれています。以前は、縄文文化は、「照葉樹林文化」に含まれると考えられていましたが、現在は、検討されています。

二　青森県の旧石器時代

青森県内にも旧石器の遺物はあり、旧石器時代として登録されている遺跡は、約二〇ヶ所あります。そのうち、つがる市丸山遺跡、外ヶ浜町大平山元遺跡、八戸市田向冷水遺跡、三沢市五川目（六）遺跡、東通村尻労安部洞窟（安部遺跡）が青森県の代表的な旧石器時代の遺跡です。この中

で大平山元遺跡は、旧石器時代と縄文時代をつなぐ遺跡としても知られています。

中南地域では、弘前市の大森勝山遺跡（写真10・註一）が旧石器時代の遺跡として知られています。それ以外の旧石器の遺跡は発見されてはいません。

しかし、田向冷水遺跡と大平山元遺跡から発見された石器は、深浦産の黒曜石を使用したものです。このような石器は、岩手県や富山県からも発見されていることから、広範囲にわたり交流があるため、中南地域、西津軽地域にも旧石器時代の遺跡があるのではないかと考えられています。

なお、黒石市では今のところ旧石器時代の遺跡及び遺物は発見されていません。

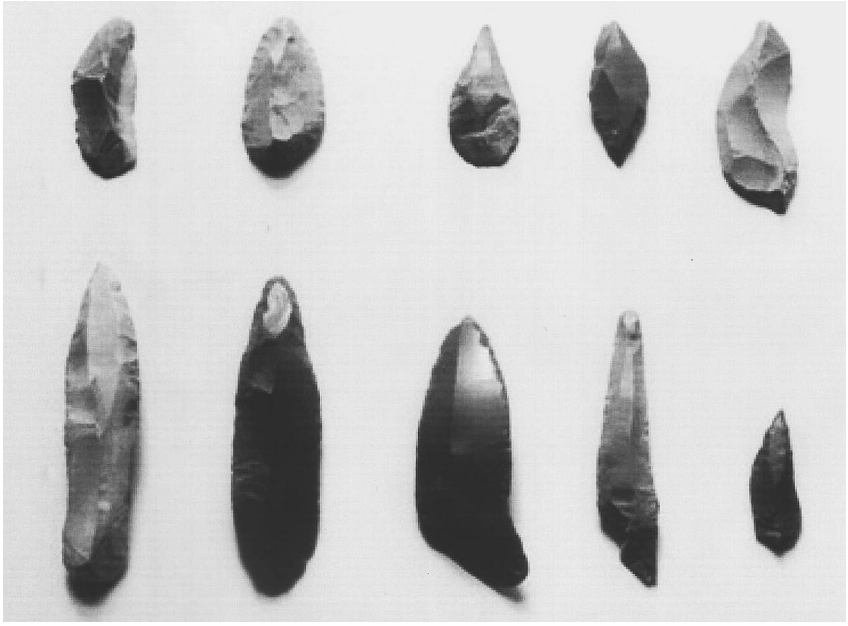

写真10　大森勝山遺跡出土・旧石器遺物

写真11　大平山元遺跡・風景

【補足：大平山元遺跡（写真11）】

大平山元遺跡は、青森県東津軽郡外ヶ浜町（旧蟹田町）を流れる蟹田川に形成された標高二十五～三十mの河岸段丘の上にあります。

昭和四十六年（一九七一）に蟹田町の中学生が拾った石器が、旧石器時代を代表とする神子柴系石器群（註二）に含まれる石斧（写真13）であることから、この場所の調査を行ってきました。同時に周辺の踏査を行い、大平山元Ⅱ遺跡、大平山元Ⅲ遺跡、大平山元（四）遺跡が発見されました。

青森県立郷土館は、昭和五十一年（一九七六）と昭和五十二年（一九七七）に旧石器文化の研究のため、大平山元Ⅰ遺跡の発掘調査を行いました。調査の結果、彫刻形石器、石刃のほか土器が発見されています。

写真13　御子柴型石器

写真12　大平山元遺跡から出土した石器と縄文土器
写真13は、左上の石器の拡大

また、平成十年（一九九八）には、遺跡発掘調査団が住宅建設に伴い発掘調査を行っています。旧石器時代の石器（写真12・写真13）のほかに土器（写真12）が発見されています。その後、大平山元Ⅰ遺跡から発見された土器に付着した炭化物を分析した結果、日本で最も古い土器であることが明らかになりました。土器については、次の縄文時代で詳しく述べます。

さらに、青森県立郷土館では、同じく旧石器文化の研究のため昭和五十二年（一九七七）と昭和五十三年（一九七八）に大平山元Ⅱ遺跡の発掘調査（写真14）を行いました。

平成元年（一九八九）には蟹田町教育委員会が建物建設に伴い、大平山元遺跡の発掘調査を行っています。調査の結果、舟底形石器、ナイフ形石器、尖頭器、彫刻形石器、大型石斧など

が発見されています。

昭和五十三年（一九七八）に大平山元Ⅲ遺跡から黒曜石が採集されたため、昭和五十四年（一九七九）に青森県立郷土館で発掘調査を行いました。また、平成十八年（二〇〇六）から平成二十年（二〇〇八）まで、外ヶ浜町教育委員会は大平山元遺跡群の保存と活用を目的に発掘調査を行っています。調査の結果、石核、彫刻形石器、尖頭器などの石器のほか小泊産の黒曜石の破片が発見されています。

写真14　大平山元Ⅱ遺跡から出土した石器の出土状況

このように、大平山元遺跡から旧石器時代の遺物（写真15）と縄文時代の最初の頃の遺物が発見されています。旧石器時代の遺物は、関東地方や中部地方で見られるような石器が発見されていることから日本列島との関連性を知ることができます。また、発見された縄文時代の土器は、日本最古の土器で今から

一万六〇〇〇年前に使用されていたことがわかりました。

このことから、大平山元Ⅰ遺跡と大平山元Ⅱ遺跡の一部が平成二十五年（二〇一三）に国の史跡に指定されました。そして、令和三年七月二十七日に世界文化遺産に登録された「北海道・北東北縄文遺跡群」の中に縄文人の暮らしを今に伝える貴重な遺跡として大平山元遺跡が含まれています。

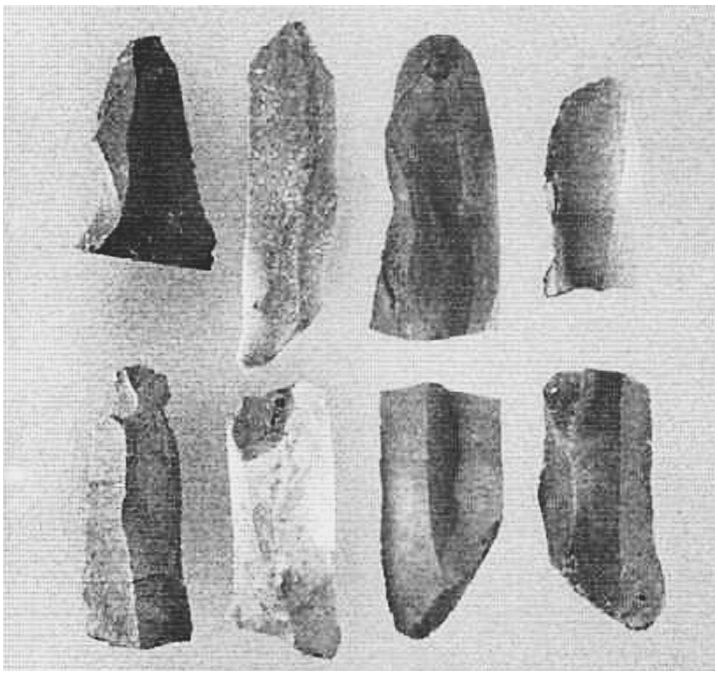

写真15　大平山元遺跡から出土した旧石器

註釈

註一　大森勝山遺跡は、岩木山の麓、弘前市大字大森字勝山にあります。昭和三十年代に岩木山麓の大規模な開発に伴い発掘調査が行われました。発掘調査の結果、晩期の竪穴住居跡、環状列石、屋外炉跡などのほか、縄文時代前期から晩期の遺物が発見されています。その後、弘前市では遺跡の保存を目的に遺跡の大部分を公有化しました。平成十八年（二〇〇六）から国史跡指定のための調査を行い、平成二十四年（二〇一二）に国史跡に指定されました。大森勝山遺跡では縄文時代晩期の環状列石（写真16）が良く知られています。

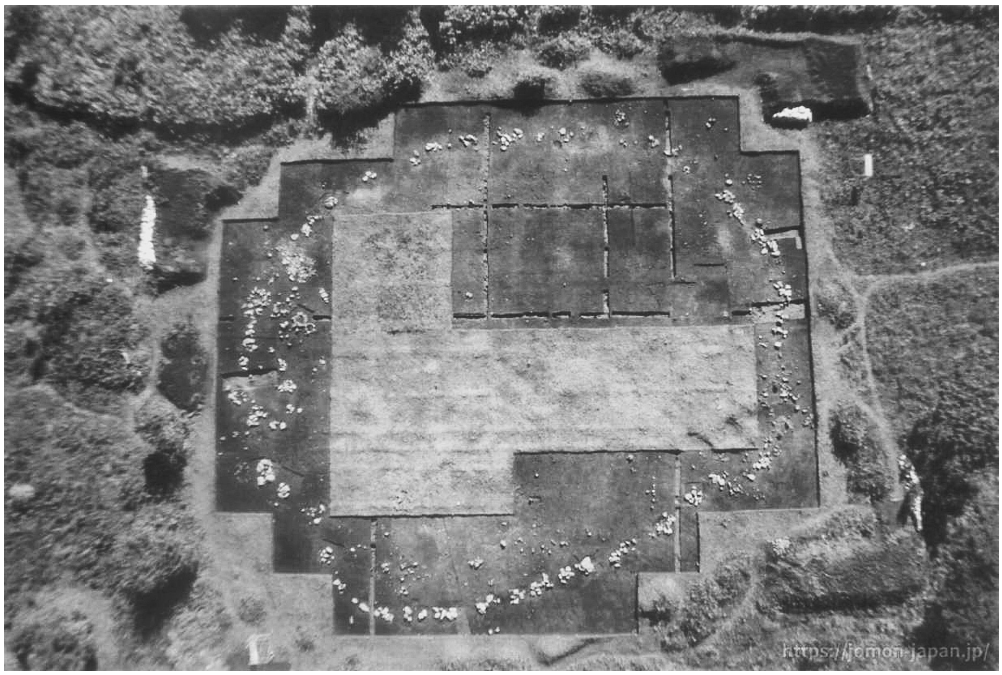

写真16　弘前市・大森勝山遺跡 環状列石

註二

長野県上伊那郡南箕輪村神子柴大清水にある神子柴遺跡は、昭和三十三年（一九五八）から三回にわたり発掘調査が行われました。発掘調査の結果、今から一万三〇〇〇年前の大型槍先形尖頭器、大型の局部磨製石斧、掻器など五十点近くの石器が発見されました。その後の調査で神子柴遺跡から発見された石器は、東日本を中心に分布していることが分かりました。そして、このような石器を神子柴系石器群とよぶようになりました。神子柴系石器群は縄文文化が発生する直前の文化として知られています。

第三章　縄文時代

一　縄文時代のはじまり

今から約一万二〇〇〇年前、地球全体が長い間、きびしい寒さが続いていた氷河期が終わり、温暖化へと移り変っていきます。日本では、土を捏ねた素焼きの土器を使い始めるようになります。縄文土器が使われていた時代を「縄文時代」といい、このころの文化を「縄文文化」と呼んでいます。

縄文時代は、今から約一万二〇〇〇年前に始まりますが、「第二章　旧石器時代」でも書いたように大平山元遺跡から一万六〇〇〇年前の土器（写真17）が出土しました。そのため青森県では、縄文時代は今から一万

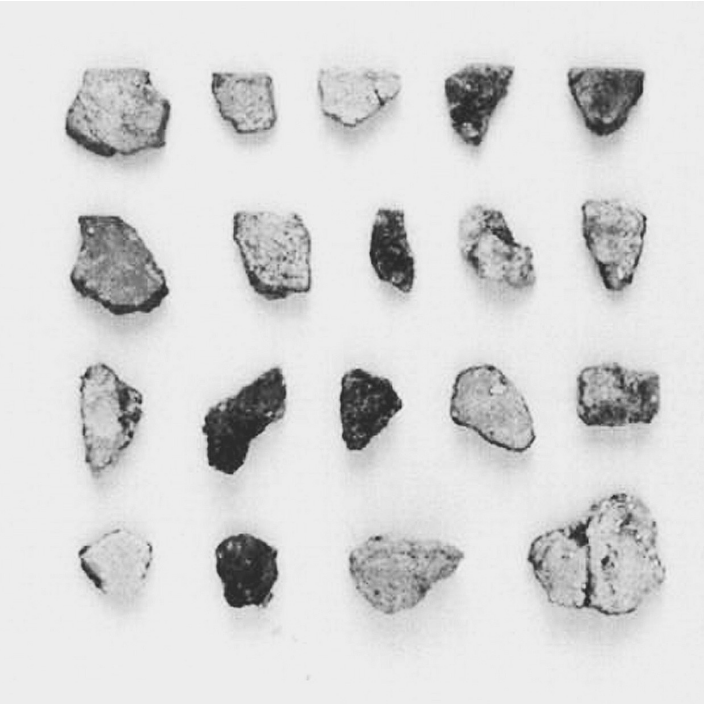

写真17　大平山元遺跡から発見された縄文時代最古の土器

六〇〇〇年前に始まったとも言われています。

学校で学ぶ歴史の教科書では、縄文時代のはじまりは一万二〇〇〇年前と書かれています。しかし、近年、縄文時代の年代については見直しが行われているところです。

二　縄文時代のくらし

それでは、縄文時代はどのようなくらしをしていたのでしょうか。ヒトの生活でよく「衣・食・住」という言葉を聞いたことがあるかと思います。この中で衣は、衣類のことです。縄文時代の衣類については、発見例が少ないこともあり、現在においても詳しいことはあまり知られていません。それ以外の縄文人のくらしはどうだったのでしょうか。これまでの発掘調査から、食事、住居、道具、祭祀、環状列石そして縄文人について述べていきます。

（一）　縄文時代の食事

縄文時代の人々は何を食べていたのか、それを知るためには、縄文時代の環境と、これまでの発掘調査で出土（しゅつど）した遺物（いぶつ）から推定することができます。

縄文時代の環境（かんきょう）は、今よりも気候が暖かく、ブナ、クリ、トチノキ、クルミ、ミズナラ、ブナなどの木々が多く育ち、豊かな森が広がっていました。縄文人は、森のめぐみである木々から実を採集し、これらを主な食料源として食べていたことが想像されます。このような木の実をどのようにして食べていたのかについては判っていませんが、全国の各地の遺跡から縄文クッキーと呼ばれるものが発見されていることから木の実（み）を加工してクッキー状あるいはハンバーグ状に焼いて食べていただろうと考えられています。

写真18　三内丸山遺跡・クリ

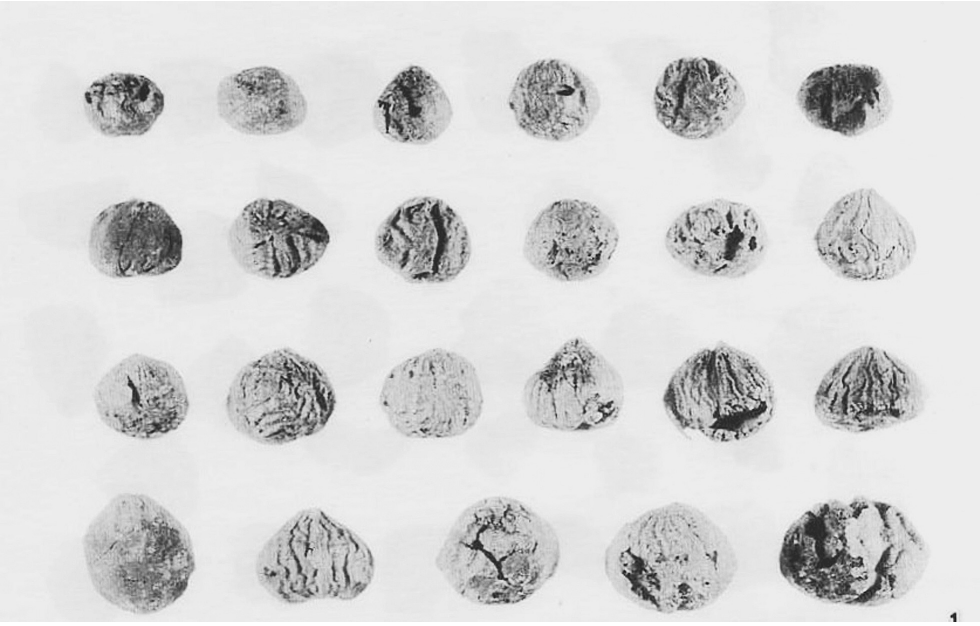

写真19　黒石市地蔵沢遺跡から出土したクリ

三内丸山遺跡では、今から五五〇〇～四〇〇〇年前の縄文時代前期から縄文時代中期にかけてクリ（写真18）の栽培が行われていたことがわかってきました。黒石市でも後で詳しく述べます花巻遺跡のすぐ近くに地蔵沢遺跡という縄文時代の遺跡があります。平成三年度と平成四年度に発掘調査をしましたが、地蔵沢遺跡から多量のクリ（写真19）が出土しています。そのため、縄文時代にはクリはよく食べられていたと考えられています。三内丸山遺跡では六本柱でできた大型掘立柱建物（註一）の柱がクリであったことから、クリは食用だけでなく、建築材としても使用されていたことが知られています。

また、食用という意味では青森県内の縄文時代中期後半の遺跡から「きのこ型土製品」（写真20）が出土しています。この時期はすでに地球の寒

写真20　八戸市丹後谷地遺跡から出土したきのこ型土製品

冷化が始まっており、生活も大集落から小集落へと変わっていく時期です。これまでも自然の恵みを採集して食料としてきましたが、寒冷化に伴い自然の恵みが少なくなり、キノコも大事な食料となっていたのかもしれません。しかし、キノコは他の食物と違い、毒性を持っています。そのため、キノコを食べて死んだり、中毒にかかったりとかなりの犠牲者も多かったと推察されます。毒性を持っているキノコを見つけることは現在でも難しいのですが、縄文時代においてはなおさら難しかったであったろうと考えられます。

きのこ形土製品をキノコの専門家に見ていただいたところ大部分が食用である可能性が高いということでした。そのため、食べられるキノコや、また後世の人々のために作られたのがきのこ形土製品だと考えられています。しかし、キノコがどのようにして食べられていたかについては解明されていません。

写真21　つがる市田小屋野貝塚

きのこ形土製品は、縄文時代中期後半から後期前半まで作られますが、それ以降は作られなくなります。その理由については今のところ判っておりません。

また、青森県には、現在約一〇〇ヶ所の貝塚が確認されています。

貝塚（写真21）は、過去の人々が貝類を採取し食べた後に捨てた貝殻が堆積してできた遺跡のことを言います。貝塚を発掘調査することにより、出土する貝殻、動物の骨、魚の骨、植物の種などから当時の自然環境をはじめ、当時食べていた食料や食生活を知ることができます。貝塚は貴重な情報源が含まれた遺跡のひとつです。

また、青森県内の貝塚からハマグリ、オオノガイ、シジミ、アサリなどの貝類のほか、サケ、

スズキ、クロダイ、ブリ、ヒラメなどの魚の骨、シカ、イノシシ、ノウサギなどの動物の骨などが発見されています。このような魚貝類や動物をどのように調理して食べていたのかということについては残念ながら解明されていません。

【補足説明：貝塚】

貝塚が分布する状況を日本全体で見てみると、太平洋側は多く、日本海側は少ないという特徴があります。青森県においても、八戸市周辺、小川原湖周辺、むつ市周辺に多くの貝塚があり、日本海側には、数か所の貝塚があるだけです。日本海側に貝塚が少ない理由は、貝が住むには適さない地形であることや、潮の干満（註二）の差が少ないことから貝の採集に適さないためと考えられます。このほかに、後の地盤の沈降により貝塚が水没したり、また、砂丘などに埋没した可能性もあります。

貝塚は、貝殻が堆積してできたことからゴミ捨て場と考えられていますが、貝塚の貝層中から埋葬人骨、飼犬の埋葬骨、美しく赤色塗料が塗られた台付浅鉢・壺形土器などの完形品、鹿角製の釣針・銛などの漁具、精

緻な彫刻の上に赤色塗料の塗られた笄（註三）、硬玉製の玉類などの各種の装身具なども発見されています。このことから、貝塚は縄文時代のごみ捨場ではなく、霊を祀りその再生を祈った祀りの場であったのではないかとも考えられています。

註釈

註一　五〇ページの「補足説明：三内丸山遺跡」の中で詳しく説明していますので参考にして下さい。

註二　干満とは、海岸などで見られる一日に一～二回見られる海面の満ちひきのことです。海面が最も高くなった状態を満潮（まんちょう）、最も低くなった状態を干潮（かんちょう）といいます。

註三　笄とは、髪をかきあげるための道具です。江戸時代には、髪をかきあげるための道具のほかに、女の人が髷にさして、かんざしあるいはヘアーピンとして使用されていたようです。

（二）縄文時代の住まい

旧石器時代は、大きな獲物を追いかけて移動しながら生活していたため、この時代の住居跡は移動ができる移動式住居が主であったろうと考えられています。移動式住居とは柱や壁を造らずに雨や風を防ぐために簡易な住居跡で、現在のテントのような住居跡を想像してみてください。

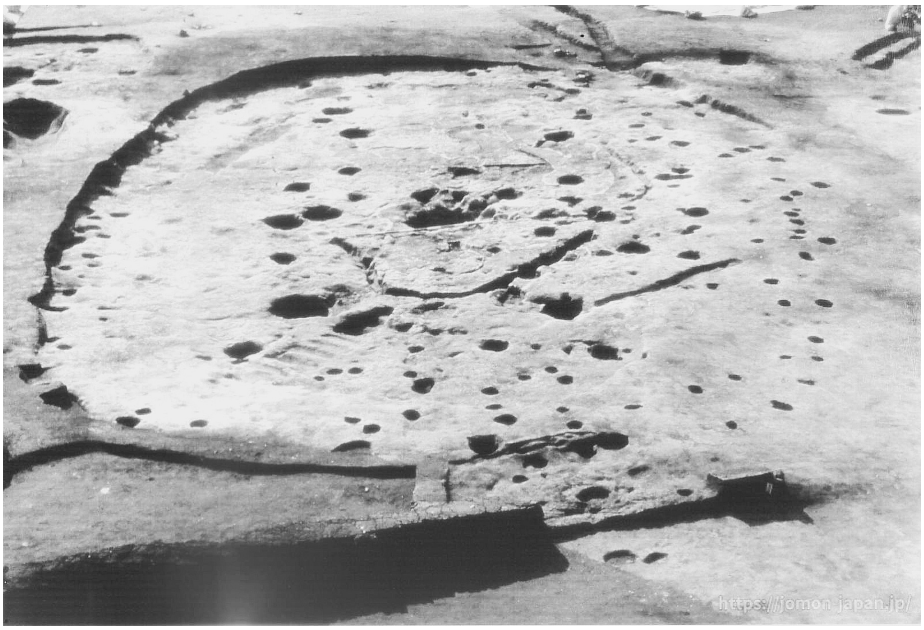

写真22　三内丸山遺跡・竪穴住居跡

縄文時代になると、生活が安定してきます。安定してくると定住がはじまります。定住がはじまると、その中に住居をはじめ、墓やゴミ捨て場などが作られるようになります。これが「ムラ」と呼ばれるもののはじまりと考えられています。

縄文人は、地面を掘り、柱を立て、その上に屋根をかけた建物に住んでいました。この建物は、竪穴式住居と呼ばれていましたが、現在は、竪穴住居、あるいは竪穴建物と呼ばれています（註一）。平安時代の遺跡からも、竪穴住居跡が発見されていますので、平安時代まで竪穴住居で生活していたことがわかります。

近年、三内丸山遺跡をはじめ縄文時代の遺跡から掘立柱建物跡が発見されています。掘立柱建物跡を復元すると高床式建物となります。私

たちが高床式建物跡といえば弥生時代の貯蔵庫を想像しますが、縄文時代から高床式建物があったことが判ってきました。

縄文時代の高床式建物の目的は解明されていませんが、集落の配置などから殯（もがり）（註二）、あるいは祭祀用の建物として建てられた可能性があります。

縄文時代の竪穴住居跡（写真22）は直径約五～六mの楕円形（だえんけい）ですが、中には一〇mを超える竪穴住居跡もあります。このような竪穴住居跡は大型竪穴住居跡と呼ばれています。この大型竪穴住居跡は、規模から集会所、共同作業所、冬期間の共同家屋などいろいろ説がありますが、何に使われていたのかについては判っていません。

註釈

註一　一般的には、「竪穴式住居跡」と呼ばれていましたが、次第に「式」が省略され「竪穴住居」と呼ばれるようになりました。しかし、近年の発掘調査で工房をはじめ、葬式前の亡骸を納めておく建物（一般には喪屋といわれています）や動物の小屋など、居住以外の目的で使われた遺構検出事例も増加しています。そのため文化庁では平成二十二年（二〇一〇）以降、『発掘調査の手引き』では「竪穴建物」と表現するような方針を示しています。「わたしたちの黒石」では、「竪穴住居」という表記をしています。

註二　殯とは、葬送儀礼のひとつで、荒城（あらき）とも言われています。亡くなったヒトを埋葬

写真23　八戸市南郷地区畑内遺跡出土土器

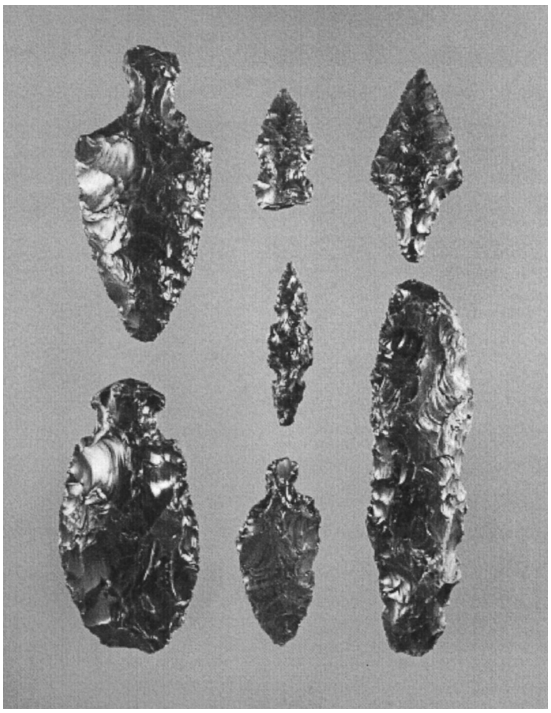

写真24　三内丸山遺跡から出土した石鏃

するまでの長い間、棺の中に納め、別れを惜しむことです。その棺を安置する場所も殯と言われています。

（三）縄文時代のいろいろな道具

縄文時代の遺跡から発見される土器（写真23）と石鏃と呼ばれる弓矢（写真24）は、縄文時代の二大発明とも呼ばれています。

土器は、粘土を捏ねって様々な形を造り、その表面に縄の文様を転がしてから、それを焼いて完成させます。完成した土器は、表面に縄の文様が付いていることから縄文土器と呼ばれています。縄文土器は、その形から深鉢型土器、浅鉢型土器、甕型土器、壺型土器、皿型土器、注口土器などがあります。

土器の発明は、食生活を変えました。深

写真25　縄文の学び舎・小牧野館の展示・縄文時代の丸木舟（復元）

鉢型土器は一般的に現在の鍋や釜と同じ使われ方をしていたと考えられています。食物に熱を加えることにより、食物が柔らかくなり、また、熱を加えることにより食べることができないモノが食べられるなど食生活が改善されました。同時に灰汁を取り除き、また、食べ物を貯蔵もできるようになったことから縄文時代の生活は、比較的安定した社会へと大きく変化していきます。

弓矢は、獲物の獲り方を変えました。これまで、多人数で獲物を捕らえていましたが、少人数でも遠くから安全に獲物を捕らえられるために弓矢が使われるようになりました。矢の先には、鋭く尖らせた石器が使われるようになりました。この石器は、石鏃と呼ばれています。その他にも、かたい木の実をすりつぶしたり、たたいたりするために摺石や叩き石、また、肉をけずるためのナイ

フ形石器、木を切りたおす石斧など、それぞれの目的にあわせた石器が造られるようになりました。

また、動物の骨や角でつり針や針を作ったり、木で容器や船のオールを作ったり、漆を道具に塗ったりなど身近にあるものを利用してさまざまな道具を作っていきました。

さらに、縄文時代の人々は、丸木船（写真25）に乗って海をわたり、遠くはなれた場所の特産品を手に入れていました。縄文時代の遺跡を見ると、新潟県糸魚川市産の翡翠や北海道の黒曜石が全国の各遺跡から発見されています。縄文時代においてすでに全国規模で交流が行われていたことが判っています。

縄文時代の遺跡からは、土器以外にも土で作った土製品が出土しています。その代表的なものは土偶（写真26・写真27）です。土偶の使用目的については、これまでいろいろと議論されてきました。土偶が意識的に壊

写真26　亀ヶ岡遺跡・遮光器土偶

写真27　三内丸山遺跡・出土土偶

されていることから、祭祀の時に災厄（註一）などを祓うために作られた、また、女性を強調していることから安産や多産などを祈るために作られたとする説などなどがあります。しかし、最近、土偶が人体を模して作ったとする通説を覆し、クルミやクリなどの食用植物を模して作ったとする説が発表されました（註二）。今後、議論されていくだろうと思われますが、未だに明確な解答はでていません。土偶以外にもミニチュア土器や刀の形をした土製品・石製品が発見されています。これらの製品も、祭祀の時に使われたものと考えられています。

注釈

註一　災厄とは、人に不幸をもたらす物事、出来事で災いのことです。災いは、禍とも書きます。

註二　令和三年に『土偶を読む』という本が出版

写真28　亀ヶ岡遺跡・土坑墓跡

されました。これまでの土偶は女性を象ったものが多いことから、用途は「安産祈願」や「豊穣祈願」ではないかと考えられていました。しかし、この本では、当時の縄文人が食べていた食物を形にしたものが土偶であるという説が唱えられました。この本は、これまでの土偶の考え方を見直してみようということから一般の人たちにも評判になり、本が発行された令和三年には第四十三回サントリー学芸賞を受賞しています。しかし、令和五年に出版された『土偶を読むを読む』という本は、『土偶を読む』での食物の形をした土偶の仮説は、もう少し検証が必要ではないか、という内容でした。土偶に関してはいまだに解明されていないのが現状です。

（四）　縄文時代の祭祀（さいし）

これまで祭祀という言葉がでてきましたが、祭祀とは、本来は神々や祖先を祀（まつ）ることです。縄文時代は、平均寿命が短く、また、胎児（たいじ）が生

写真29　青森市小牧野遺跡・環状列石

まれてきても新しい生命が育っていく確率が低くかったとも言われており、縄文人は、現在の私たちより強い生死観を抱いていただろうと思われます。

縄文時代の遺跡から土壙墓（写真28）をはじめ、配石遺構、環状列石（写真29）など数多くの祭祀遺構が発見されているのはそのためです。土壙墓からは、土偶や漆塗りの櫛、石製品や貝殻製品などが発見されていることから死んだヒトに対しては丁重な葬祭を行っていたことが推測されます。

（五）　環状列石

環状列石は、本来であれば、「（四）　縄文時代の祭祀」のところで述べられる遺構ですが、環状列石は縄文時代では特別な遺構なので詳し

く述べます。

環状列石は、直径が三〇～四〇ｍの円形の周りに石を並べて造った遺構のことです。一般的には、ストーン・サークルとも呼ばれています。

主に南北海道から北東北地方の広い範囲で縄文時代中期後半から後期にかけて造られます。しかし、弘前市の大森勝山遺跡のように縄文時代晩期にも環状列石が造られることが判ってきました。

環状列石が造られる目的は、日時計（ひどけい）、墓地、あるいは御祀り広場などいろいろな説がありますが、環状列石が造られた理由についてはまだ解明されていません。最近、環状列石を「大規模記念物（だいきぼきねんぶつ）」とみている学者もいます。大規模記念物とは、縄文人が現代の我々に対して、また、未来の人たちに対して送ってくれたメッセージとして造られた構築物のことです。いずれにしても、環状列石は、謎の多い遺構です。

黒石市では、今のところ環状列石は発見されていません。しかし、平川市柏木町藤山（かしわぎまちふじやま）にある太師森遺跡（たいしもりいせき）からは環状列石が発見されています。太師森遺跡は、黒石市大字浅瀬石字浅瀬石山地区に隣接しています。また、太師森遺跡の南東側に虹の湖がありますが、その虹の湖の近くに一ノ渡遺跡（いちのわたりいせき）

図６　縄文人・イメージ

があります。一ノ渡遺跡は、太師森遺跡と同じ縄文時代後期の遺跡ですが、石を並べて大きな規模の配石遺構を造っています。この配石遺構のことについては、「三　黒石市内の縄文時代の遺跡　（三）一ノ渡遺跡」に詳しく書いていますので参考にして下さい。環状列石と配石遺構の関連性については判りませんが、縄文時代後期には、大きな石を使用して規模の大きな構築物を造っていくという特徴があるようです。

（六）　縄文時代のヒト（図６）

縄文人の平均身長は、これまで発掘調査で発見された人骨などから男の人で一五七㎝位、女の人で一四七㎝位であると推定されています。

身長は低めですが、手足には狩猟（しゅりょう）や採集（さいしゅう）を行うために筋肉がしっかり付いていたと考えら

写真30　三内丸山遺跡・遠景

れています。

縄文人の平均寿命は、男性三十一・一歳、女性三十一・三歳とされています。しかし、この年齢は十五歳未満の埋葬人骨が含まれていないことから実際の平均寿命はこれより更に短くなると考えられています。

【補足説明：三内丸山遺跡】

令和三年七月二十七日に青森県をはじめ、北海道、岩手県、秋田県に所在する十七カ所の遺跡が「北海道・北東北の縄文遺跡群」として世界文化遺産に登録されました。この遺跡の中に三内丸山遺跡が含まれています。

三内丸山遺跡（写真30）は、青森市三内丸山地区にあります。この場所は八甲田山麓からのびる緩やかな丘陵の先端部であり、縄文時代には、

落葉広葉樹の森林が広がる環境にありました。

また、この場所から多量の土器が出土していることが江戸時代から知られており、周辺には、三内丸山遺跡のほか、三内沢部遺跡、熊沢遺跡、近野遺跡など数多くの遺跡が立地しています。環境的にもヒトが住みやすい環境であっただろうと考えられています。

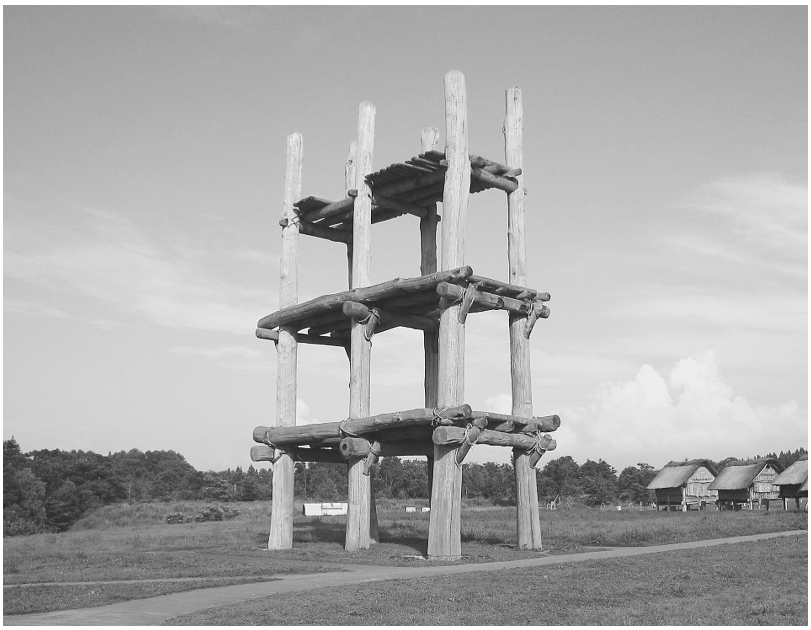

写真31　三内丸山遺跡・復元された大型掘立建物跡　六本柱

青森県では総合運動公園の老朽化に伴い、三内丸山遺跡が立地する台地に県営野球場と新しい施設整備が計画されていました。そのため平成四年度から三内丸山遺跡の発掘調査が開始されました。

しかし、発掘調査の結果、縄文時代前期から中期にかけての大規模な集落跡であることがわかりました。そのため、平成六年八月に県営野球場の建設中止が決定しました。

そして、青森県は平成十年に『史跡三内丸山

写真32　三内丸山遺跡・復元された大型竪穴住居跡

遺跡整備計画』が作成され、三内丸山遺跡を保存し、活用していくことにしました。その結果、三内丸山遺跡は、平成十二年十一月二十四日に特別史跡に指定されています。

三内丸山遺跡の発掘調査では、竪穴住居跡、大型掘立柱建物跡、掘立柱建物跡など建物跡の遺構が七八〇棟以上のほか、土壙墓跡などのお墓をはじめ、土器を作るための粘土を採掘した跡、盛土状遺構、縄文時代の道路などが発見されています。

この中で特に注目されているのが大型掘立建物跡で、一般には、六本柱と呼ばれている建物跡です。三本の柱が二列、合計六本の柱でできた建物跡です（写真31）。柱と柱の間隔が、四・二m、幅二・〇mで並んでいます。柱の直径は、約二・〇mですが、六本ともクリの木を使用し

写真33　三内丸山遺跡・土器の出土状況

ています。六本柱の建物跡は、どのような目的で建てられたのかは不明です。

しかし、夏至や冬至などの天文や季節を知るための施設、寝殿や宗教的な施設、物見櫓、灯台など色々な説があります。そのため、柱だけの建物跡にするか屋根や床を付けた建物にするか色々と議論されましたが、今でも解明されていないことから六本柱だけの建物になっています。

また、竪穴住居跡もかなりの軒数が発見されていますが、幅一〇mを超える竪穴住居跡も発見されています。大型竪穴住居跡は、数軒発見されていますが、この中で特に大きい長さ三二m、幅一〇mの竪穴住居跡（写真32）が復元されています。この住居跡は集会場のような役割をしていただろうと考えられています。また、縄文人が一般的に居住していた竪穴住居跡や貯蔵

庫（こ）として利用されたと考えられる掘立柱建物跡が復元されています。復元されたものから、縄文時代がどのような生活をしていたのか想像してみてください。

これ以外に三内丸山遺跡で特徴的な遺構は、盛土状遺構（もりどじょういこう）です。盛土状遺構とは、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、お墓などを掘ったときに捨てられた土、また、壊れた土器が捨てられたゴミ捨て場ですが、小山のような状態で発見されました（写真33）。厚さは約二・〇mで北側、西側、南側に確認されています。

三内丸山遺跡から出土した遺物は、段ボールで数万箱といわれています。大部分が縄文土器や石器が主ですが、この他に日本最大の板状土偶（ばんじょうどぐう）や翡翠（ひすい）の玉（写真34）などの土製品や石製品も出土しています。翡翠（ひすい）の玉は新潟県糸魚川市が生産地であるため縄文時代には、北陸と交流していたことが知られています。

また、出土した遺物の中には、動物遺体（どうぶついたい）が

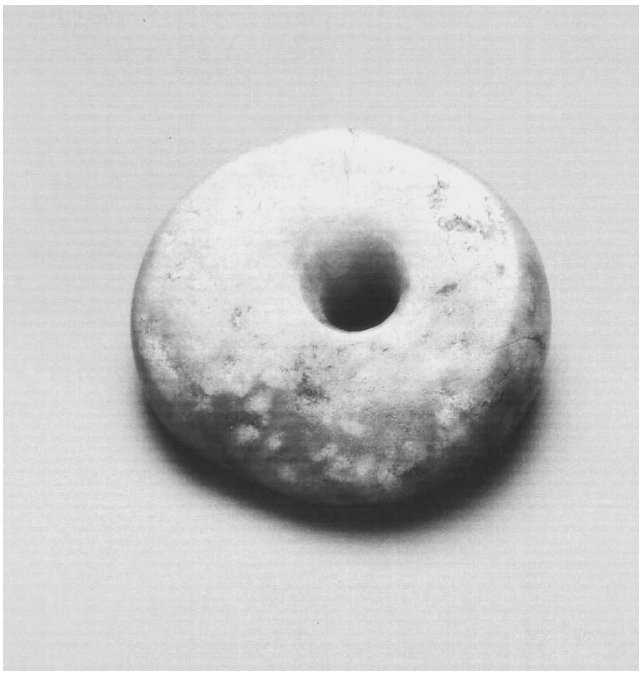

写真34　三内丸山遺跡・翡翠の玉製品

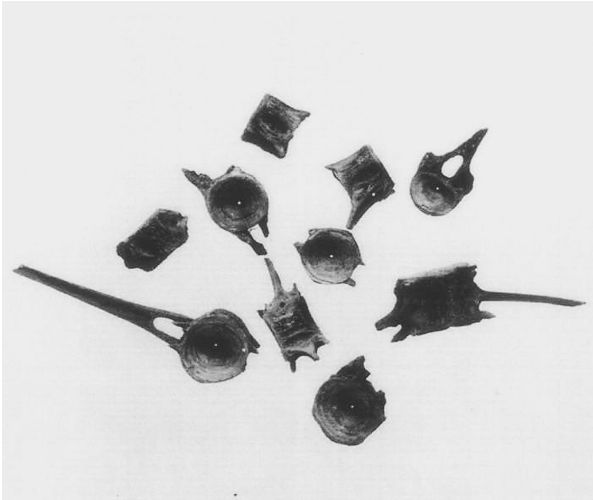

写真35　三内丸山遺跡・ヒラメの骨

写真36　三内丸山遺跡・オニグルミ

ありました。動物遺体を詳しく調べてみると大部分が魚類で、残りは哺乳類と鳥類でした。魚類では、ヒラメ（写真35）、マダイ、サメの骨のほか、クジラやアシカの海獣の骨も発見されています。哺乳類は、縄文時代ではシカやイノシシが一般的には知られていますが、三内丸山遺跡からはノウサギとムササビが発見されています。また、多数のクリ、クルミ（写真36）、トチなどの殻、さらにはエゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメなどといった植物も出土しています。これらの植物を詳しく調べていくとクリやクルミなどは、自生しているものだけでなく栽培していることも分かりました。特にクリは食用だけでなく、建物の柱や燃料としても活用されていたことが分かってきました。

このように三内丸山遺跡の発掘調査から三内丸山のヒトたちは、狩猟採集生活だけでなく、樹木や植物を栽培して生活しており、大規模な集落が営まれている

写真37　縄文時遊館

ことが解明されています。このことから三内丸山遺跡は縄文時代を理解する上でも歴史的価値のある遺跡と考えられます。

現在、三内丸山遺跡の敷地内には、六本柱の建物跡や大型竪穴住居跡や掘立柱建物跡、竪穴住居跡が復元されていますが、この他に、「縄文時遊館」（写真37）という建物があります。この建物には、遺跡を紹介する映像を上映するシアターや三内丸山遺跡から出土した大型土偶や縄文ポシェットとよばれる縄文時代の小物入れをはじめ縄文人の生活を再現した常設展示、特別な遺物を展示した企画展示室、体験工房などが整っています。この建物の展示などを見学することにより三内丸山遺跡を楽しく学ぶことができます。

三内丸山遺跡は平成六年度に一般公開され

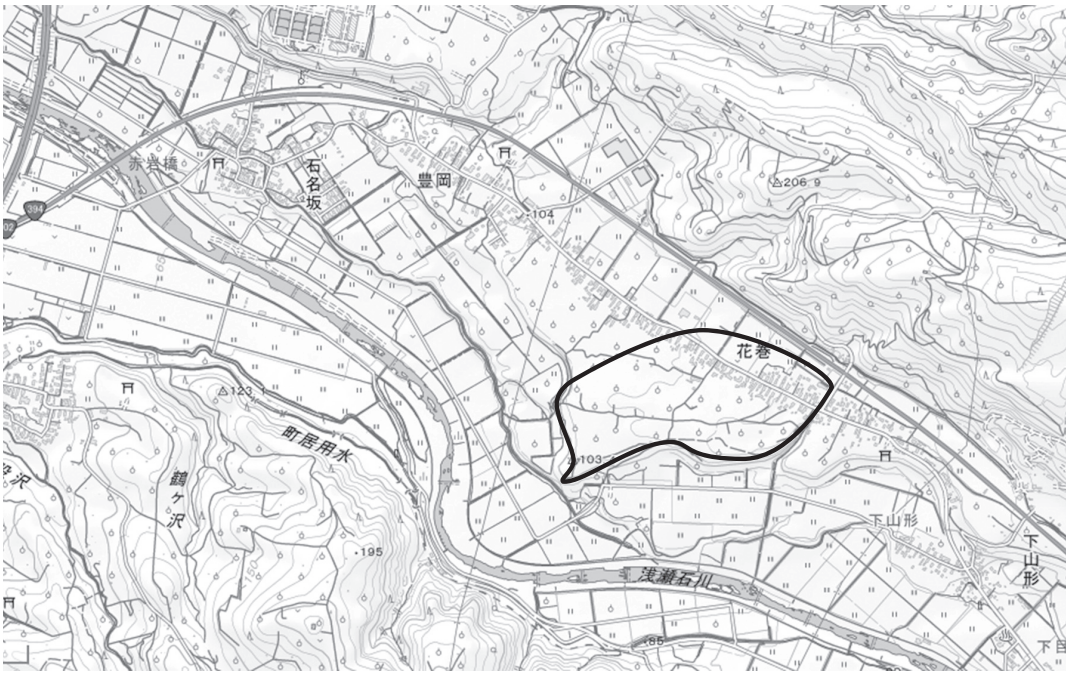

図７　花巻遺跡位置図（図中〇位置）

ましたが、令和四年十月には、見学者が九〇〇万人を超えました。今でも一日、一〇〇〇人以上の見学者が訪れています。

三　黒石市内の縄文時代の遺跡

（一）　はじめに

「第一章　五　黒石市の遺跡」でも述べたように、黒石市内では十六ヶ所の遺跡を発掘調査しています。そのうち、縄文時代の遺跡は、九ヶ所ありました。特に、考古学史上有名な花巻遺跡をはじめ、特徴のある遺跡が四ヶ所ありますので紹介します。

（二）　花巻遺跡（はなまきいせき）（図７）

黒石市では、花巻遺跡の発掘調査を昭和六

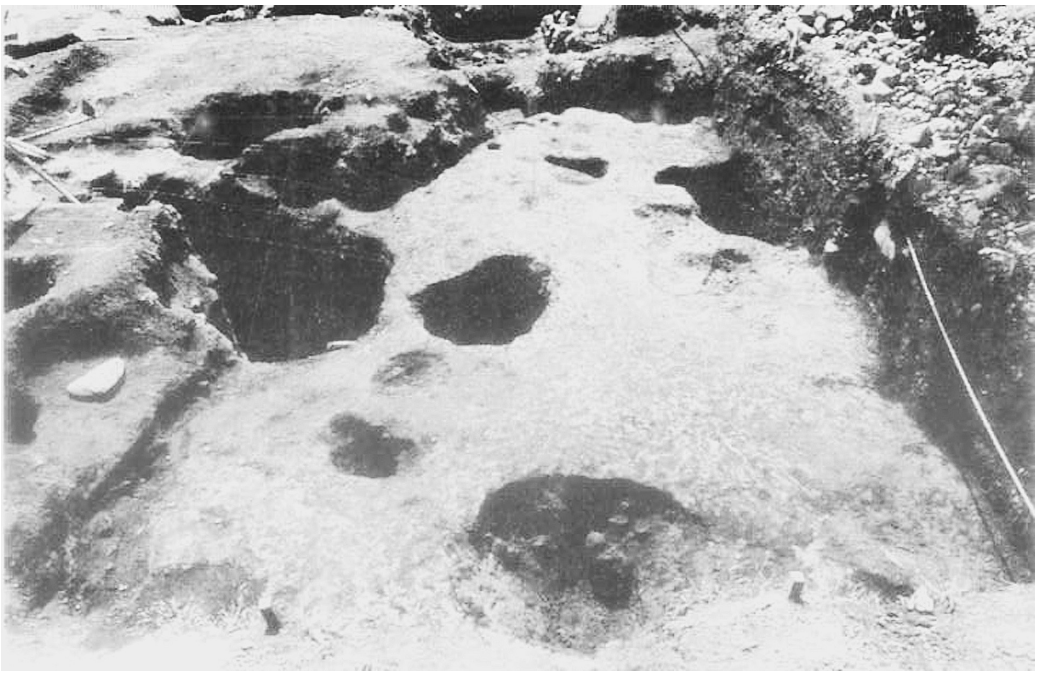

写真38　花巻遺跡・竪穴住居跡

十年度と昭和六十二年度に行いました。発掘調査した場所は、黒石市大字花巻字鷹待場（現在は黒石市大字花巻字南家岸）で、現状は果樹園です。

昭和六十年度の発掘調査は、調査期間が八月二十八日から九月七日までの十一日間、発掘調査面積は一〇〇㎡でした。発掘調査の結果、竪穴住居跡一棟、土坑跡十基、石棺墓六基が発見され、縄文土器、弥生土器、石器、土製品、石製品が出土しています。

竪穴住居跡は、平面形が楕円形、長軸が六・〇m以上、年代は、縄文時代中期前半（約四〇〇〇～五〇〇〇年前）の大型竪穴住居跡（写真38）です。この大型竪穴住居跡は、昭和六十年度の調査では全体を掘ることができませんでした。昭和六十二年度の発掘調査で残り

写真39　花巻遺跡・石棺墓

の部分を掘っています。

また、石棺墓（写真39）が六基発見されています。石棺墓とは縄文時代後期前半の特殊なお墓です。比較的大きい偏平な石で箱型の棺桶を造ります。その中に死んだ人間を埋葬し、偏平な石で蓋をするものです。

しかし、埋葬された人間が最後まで石棺墓の中に入っているわけではありません。腐敗が進むと傷みがでて、最後は骨だけが残ります。石棺墓からそのような人骨を取り出し、川辺で丁寧に洗い、人骨を土器の中に埋納したと考えられています。埋納された土器は甕棺といいます。このような埋葬のことを考古学では改葬甕棺墓と呼んでいます。残念ながら花巻遺跡からは甕棺は発見されませんでしたが、甕棺が存在する可能性はあります。

写真40　花巻遺跡・土器囲い炉　埋設状況

石棺墓のほかに土坑跡が十基発見されています。「土坑跡」とは、人間が掘った穴の跡のことを言います。発掘調査で土坑跡が発見されますが、何のために造られたのかが判らないものがたくさんあります。また、人骨をはじめ、完全な土器・土製品などが発見される土坑跡はお墓として使用された可能性がありますので「土坑墓」と呼んでいます。花巻遺跡からは、土坑墓跡が二基発見されています。

昭和六十二年度に行った発掘調査は、昭和六十年度に行った発掘調査を行った場所の隣の場所でした。調査期間は八月二十日から九月二日までの十四日間、発掘調査面積は二〇〇㎡でした。発掘調査の結果、竪穴住居跡一棟、土坑跡十二基、石棺墓一基、配石遺構一基、石囲い炉一基が発見され、縄文土器、石

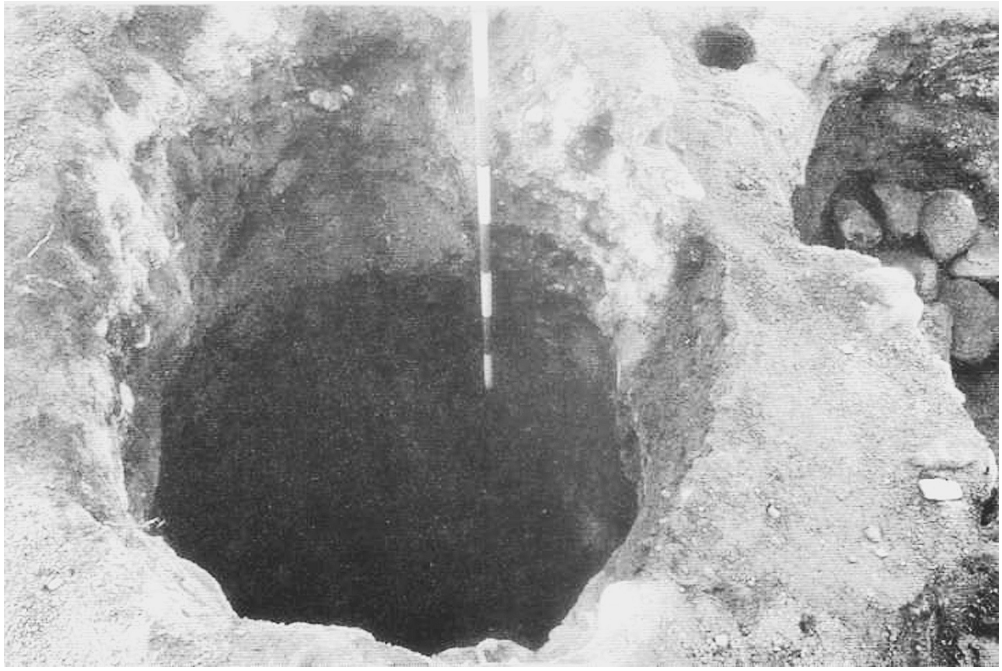

写真41　花巻遺跡・フラスコ型土坑跡

器、土製品、石製品が出土しています。

このうち、竪穴住居跡は、昭和六十年度に発見された竪穴住居跡の続きでしたが、かなりの大型竪穴住居跡であることから住居跡全体は発見することはできませんでした。昭和五十年代になってから青森市の近野遺跡（ちかのいせき）をはじめ、県内外から長さが二十m前後の竪穴住居跡が発見されるようになります。三内丸山遺跡では三十mを超える大型竪穴住居跡が発見されています。花巻遺跡でも同じような大型竪穴住居跡があることから、大集落が営まれていただろうと考えられています。

そして、この竪穴住居跡から土器囲（どきがこ）い炉（ろ）（写真40）が発見されています。土器を横に切断し、それを床に埋めて炉として使用します。土器を使用して炉を造る理由は、よくわかっ

ておりませんが、竈の神様のような考え方がすでに縄文時代から存在していたのではないでしょうか。

また、土坑跡十二基のうち、四基がフラスコ型土坑跡（写真41）です。断面形が理科の実験で使われるフラスコ（図8）に似ていることからフラスコ型土坑跡、あるいはフラスコ状土坑跡と呼ばれています。フラスコ型土坑跡が使用される目的は未だに解明されていません。しかし、三戸町泉山遺跡から発見されたフラスコ型土坑跡からは堅果類が貯蔵されていたことから食料の長期保存用として使われていたと推定されています。また、上北町（現在、東北町）古屋敷貝塚や岩手県二戸町上里遺跡から発見されたフラスコ型土坑跡からは人骨が発見されていたことからお墓としても使われていたと推定されています。フラスコ型土坑は労力と時間を費やして造りますが、非常に壊れやす

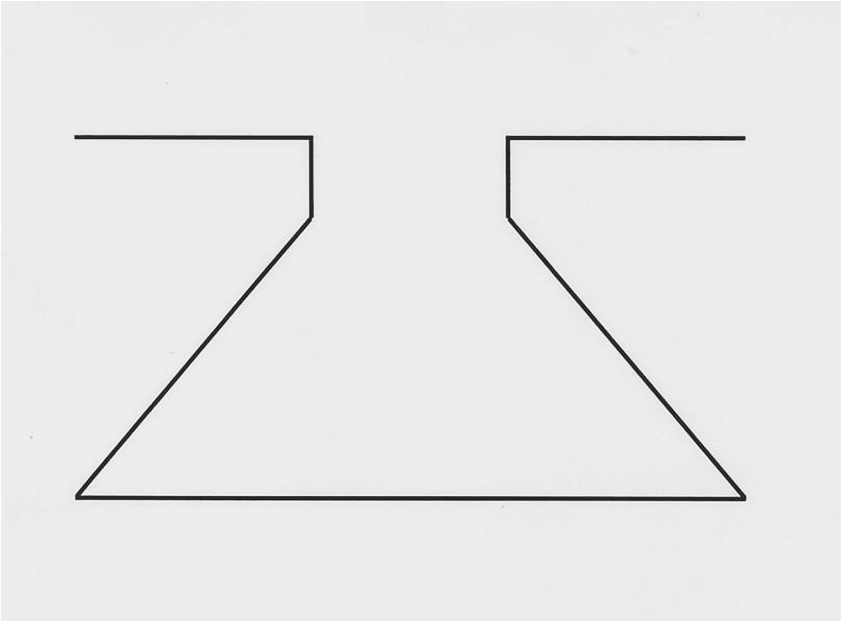

図8　フラスコ型土坑跡の断面形・イメージ図

いという特徴があります。それでも縄文人はフラスコ型土坑跡を造ります。フラスコ型土坑跡が造られる目的は、未だ解明されていませんが、お墓として造るのではないでしょうか。それが、何かの理由により貯蔵用の施設として使用されたものだろうと考えています。

【補足説明：花巻遺跡研究史】

花巻遺跡は、江戸時代から知られている遺跡です。最も古い文献として、菅江真澄（図9・註一）が著した『追柯呂能通度』があります。真澄は、三河国（現愛知県豊橋市）出身ですが、江戸後期の旅行家、博物学者として知られており、彼が滞在した様子を日記やスケッチにして書き残しています。

真澄は、天明三年（一七八三）二月に三河国を旅立ちますが、以来二十八年間、各地の名所や古跡などをめぐり歩きました。

最初に青森を訪れたのは、天明五年（一七八

図9　菅江真澄肖像画

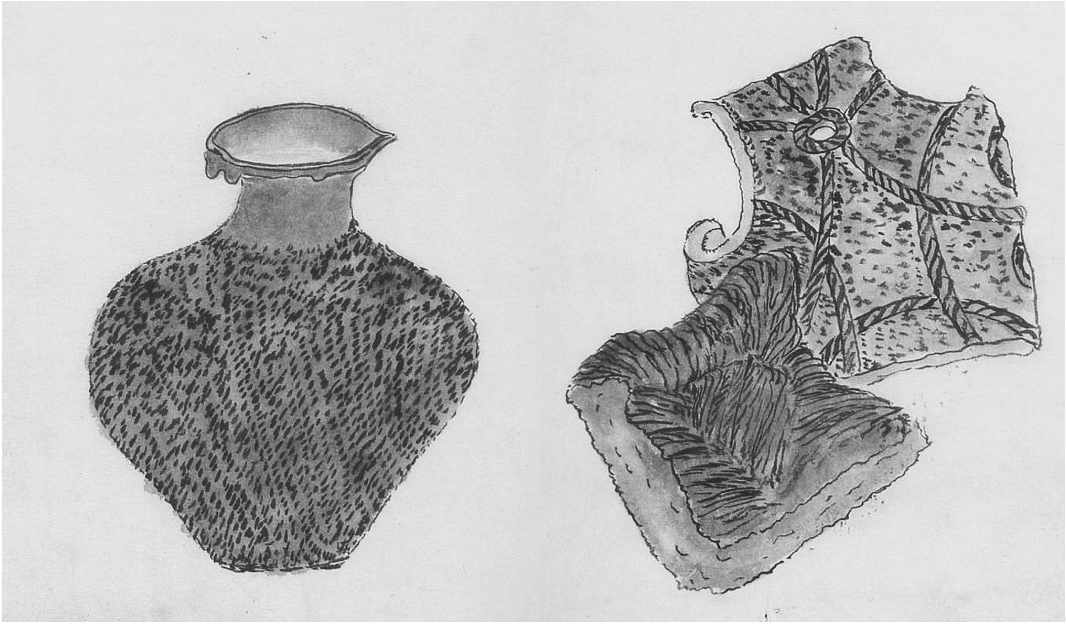

図10　菅江真澄がスケッチした花牧の瓦やこがめ

五）八月です。それから七年後の寛政四年（一七九二）十月に再び青森に入り、九年間青森で過しています。その間、寒苗（現在の「三内丸山」）、甕が岡（現在の「亀ヶ岡」）、花牧（現在の「花巻」）から出土している瓦（土器のこと）やこがめなどを日記とスケッチを書き残しています。

黒石の花牧を訪れたのは、寛政十年（一七九八）です。この年に上十川にしし石を見た後に花牧を訪れています。花牧からは、寒苗と同じような瓦や甕が出土しており（図10）、出土している様子は、甕が岡と同じであると『追柯呂能通度』に書いています。

真澄の書いた日記とスケッチは、日本の考古学にも大きな影響を与えました。

さて、明治時代になるとエドワード・S・モー

写真42　佐藤蔀

写真43　工藤彦一朗

スは、明治十年（一八七七）九月に大森貝塚の発掘調査を行いました。その後のモースの業績から、彼は、わが国の考古学の基礎を築いた人物と言われるようになりました。

このことが契機になり、日本の考古学が歩み始めると、青森県の遺跡にも目が向けられるようになりました。亀ケ岡遺跡の土器や土偶が最も注目されましたが、次第に花巻遺跡から出土した土器にも目が向けられるようになりました。

大森貝塚の発掘調査から七年後の明治十七年（一八八四）に人類学会が創設されます。後に東京人類学会と改名され、全国的な組織になっていきますが、その中に青森県の研究者である佐藤蔀（写真42）、工藤彦一朗（写真43）らがいます。

佐藤蔀は、亀ケ岡遺跡出土の遮光器土偶について「瓦偶人之図」という論文を発表した人物

写真44　三内丸山遺跡・円筒土器

です。また、工藤彦一朗は田舎館村の初代村長を務めた人物ですが、田舎館式土器の最初の発見者として知られています。佐藤部も工藤彦一朗も東京人類学会の機関紙『東京人類学会報告』に花巻遺跡に関する論文を発表していきます。

工藤は、明治二十一年（一八八八）に「陸奥ノ珠玉」という論文を発表しました。この論文は、花巻遺跡から出土した翡翠の玉について紹介した文書です。この翡翠の玉は、現在はどこにあるのか分かりません。

佐藤は、花巻遺跡から出土した土器について明治二十二年（一八八九）に「陸奥国津軽郡花巻村ヨリ出デタル大甕」という論文を、明治二十三年（一八九〇）には、「アイヌノ口碑ヲ駁シ併セテ本部石器時代ノ遺物遺跡ハアイヌノ物

ナルヲ論ス」（註二）という論文を発表しています。工藤や佐藤以外にも花巻遺跡を取り上げた論文は幾つか発表されています。

青森県の土器といえば亀ヶ岡式土器がよく知られていますが、円筒土器（写真44）も代表的な土器の一つです。円筒土器は、南北海道から北東北地方に分布している土器です。そのため、青森県内は縄文時代前期から中期の遺跡にはほぼ出土している土器です。

円筒土器の研究は、大正十五年（一九二六）に東北大学医学部の長谷部言人が同じ大学に在籍していた山内清男の協力を得て三戸郡是川村一王寺貝塚の発掘調査を行ったことから始まります。この調査の結果、「円筒下層式土器」と「円筒上層式土器」が誕生しました。しかし、この円筒土器に異を唱えた人物がいます。その人物は、中谷治宇二郎（註三）です。中谷は、東京大学に入学してからヨーロッパの進歩的な考古学研究の方法論を学ぶためフランスに留学しますが、留学する前に東北地方の調査を行っていま

写真45　佐藤雨山

す。この調査は、昭和三年（一九二八）七月下旬から行われました。

調査した場所は、秋田県大館町（現在は、秋田県大館市）、青森県津軽地方、上北地方です。中谷が大館町に行ったときに菅江真澄の『真澄遊覧記』を見る機会があり、その中に花巻から大型の甕が多量に出土していることを知ります。それからすぐに花巻を訪れます。

中谷は、佐藤雨山（写真45・註四）の案内で花巻遺跡の発掘調査を行っています。調査期間はわずか二日間でしたが、二m×二mの発掘調査区域を設定し、調査を行いました。調査の結果、縄文時代の円筒上層式土器をはじめ、石皿などを発見しました。そしてこの時に、出土している円筒上層式土器に「花巻式土器」の名称を与えました。

中谷が、東北地方の調査を終えた翌年、昭和四年（一九二九）にフランスに留学します。中谷が留学している間、山内清男は、「関東北に於ける繊維土器」の論文を発表しています。この論文は土器の紋様の違いから円筒土器を細分し、縄文時代前期と中期の年代を確立させました。

昭和七年（一九三二）に中谷治宇二郎はフランスから帰国します。しかし、帰国して四年後の昭和十一年（一九六三）、中谷はこの世を去ります。

享年三十五才、若くしての逝去でした。

中谷の死は考古学界において大きな衝撃でした。彼は、留学する前に提唱した「花巻式土器」についてもう少し研究したかったに違いありません。中谷の死と共に「花巻式土器」という名前は使われなくなりましたが、円筒土器文化は継承されてきました。そして、花巻遺跡は保存され、現在に至っています。

註釈

註一　菅江真澄は、三河国（現在、愛知県）出身です。天明三年（一七八三）に郷里を出発し、信濃、越後を経て、出羽、陸奥、蝦夷地を旅していますが、三河国に帰ることなく秋田で生涯を閉じます。真澄は、滞在した様子を日記やスケッチにして書き残していますが、当時の生活を知る上で貴重な資料になっています。秋田県立博物館の中に菅江真澄資料センターがあり、そのセンターで菅江真澄の資料や記録を見ることができます。

註二　「アイヌノ口碑ヲ駁シ併セテ本部石器時代ノ遺物遺跡ハアイヌノ物ナルヲ論ス」をもう少しわかりやすく説明します。「アイヌノ口碑」とは、石碑に刻んだ文書が後世に残ることから言い伝えや伝説と意味があると考えられます。「駁シ」とは、間違っている説を正すということです。「諭す」とは、物事の内容がわかるように話聞かせることです。このことから、題名の意味は、アイヌの伝説を正しく伝え、石器時代の遺跡や遺物はアイヌのものであることをわかりやすく説明するという内容であると考えられます。

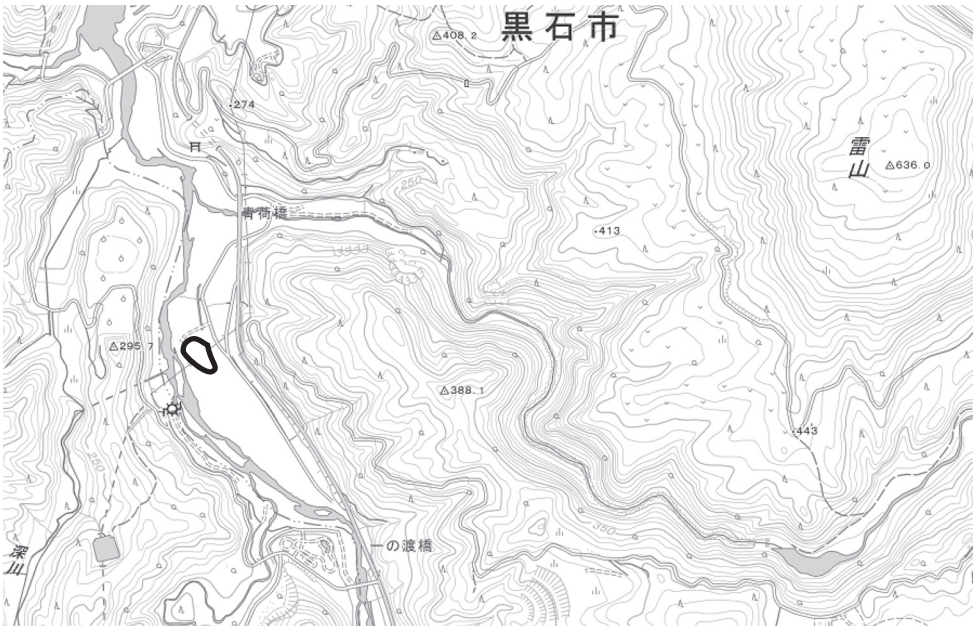

図11　一ノ渡遺跡位置図（図中○位置）

註三　中谷治宇二郎は、明治三十五年（一九〇二）に石川県加賀市で生まれました。兄は雪の結晶の研究で著名な北海道大学教授中谷宇吉郎です。

註四　佐藤雨山は、本名を佐藤耕次郎といいます。明治二十六年（一八九三）に黒石町で生まれます。植物の研究家で有名ですが、郷土史家としても知られています。

（三）一ノ渡遺跡（図11）

黒石市では、昭和四十八年度から浅瀬石川ダム建設の事業が進められていました。一ノ渡遺跡がある大字沖浦字一ノ渡村上は、湛水予定地（註一）になっていることから、昭和五十六年に分布調査を実施しました。その結果、多くの土器や石器が出土し規模の大きい遺跡であることから昭和五十七年度に発掘調査を実施し、記録保存することにしました。

写真46　一ノ渡遺跡・祭壇として使用された組石遺構

一ノ渡遺跡の発掘調査は、昭和五十七年四月二十日から十月三十一日まで行われました。発掘調査の結果、竪穴住居跡一棟、配石遺構六十七基、土坑跡二十二基、埋設土器遺構二基などが発見され、縄文土器、石器のほか多量の土製品や石製品が出土しています。

遺構の中で特に特徴があるのは配石遺構です。配石遺構とは、地面や河原にある自然石を並べたりして造り上げた当時の構築物です。石を列状に並べたものを列石遺構、円形に並べたものは環状配石遺構、あるいは環状列石、また、長方形や円形などを組み合わせたものが組石遺構と呼ばれています。また、大きな石を地面に突き刺して垂直に立てた立石遺構や、拳大の礫やその破片がまとまった状態で発見される集石遺構などがあります。

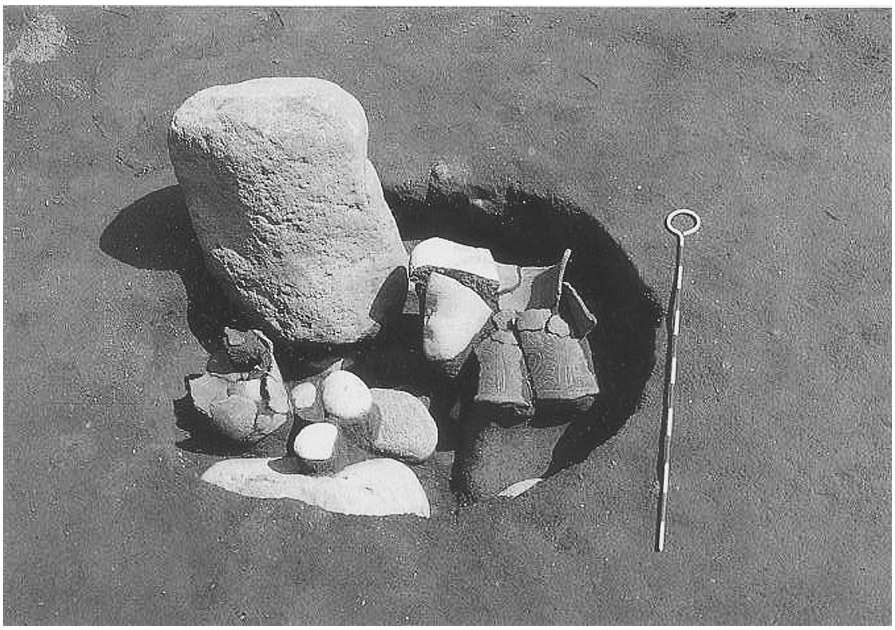

写真47　一ノ渡・立石遺構

一ノ渡遺跡で発見されている配石遺構は、組石遺構、列石遺構、集石遺構、立石遺構などが発見されています。

組石遺構は、五十六基検出されていますが、この中に長辺一三・九六m、短辺三・〇四mの大型の組石遺構（写真46）があります。形状は長方形で、大きい石や小さい石が敷かれたように置かれています。この組石はどのような目的で造られたのかは不明ですが、祖先崇拝を中心とした多目的な祭壇の場であり、複数の集落が共同で利用した祭壇として造られたのではないかと考えられています。

また、このほかに立石遺構（写真47）が発見されています。立石遺構というのは、穴を掘り、その中に棒状の石と土器などを置いたものです。一ノ渡遺跡からは三基が発見されていますが、

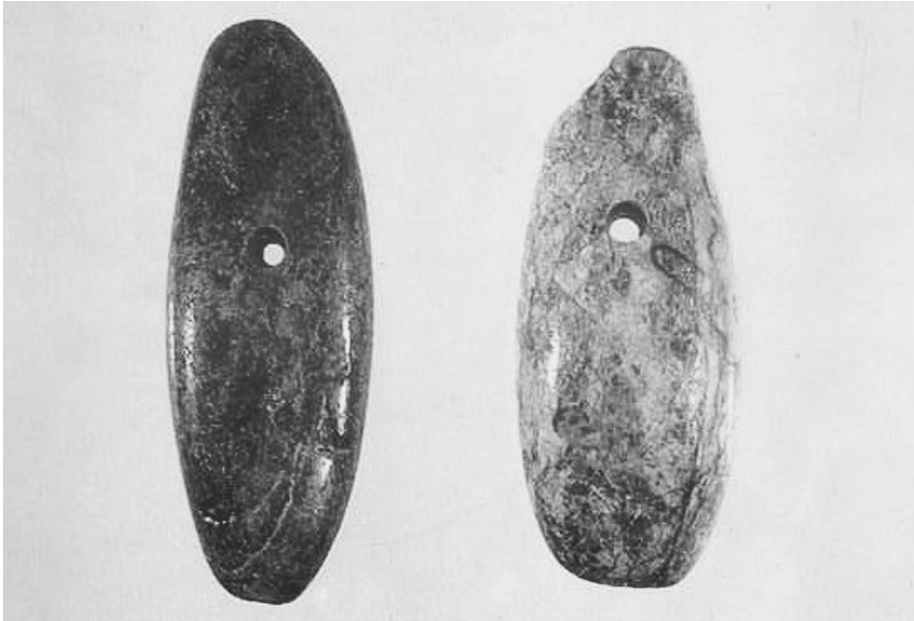

写真48　一ノ渡遺跡・硬玉製大珠

その内の一基は、大きさが九十四㎝×七十八㎝の楕円形の土坑跡に直径三十㎝、長さ五十㎝の比較的大きい石を立たせ、その周りに土器と小さい石を並べています。立石遺構の使用目的は、儀礼か信仰として造られたものと考えられています。

出土遺物は、土器や石器のほかに多量の土製品や石製品があります。石製品のうち硬玉製大珠（写真48）が二点出土しています。硬玉製大珠というのは、翡翠の玉のことです。二点とも鰹節に類似していることから鰹節型大珠とも呼ばれています。穴が開いていることから、紐状のものを通し、首から掛けて装飾品として使用したものと推定されます。

この二点の硬玉製大珠の原産地は、新潟県糸魚川市です。そして、この製作技術は、北陸

地方の伝統技術であることから完成品として一ノ渡に持ち込まれた可能性があります。

硬玉製大珠以外には、鐸型土製品、円盤状土製品、三角型土製品、方形板状土製品、三角形岩版、円形岩版、方形岩版、球状石製品、石冠、碗型石製品、舟型石製品、石棒、石刀などが出土しています。この中で円盤状土製品や三角状土製品は、壊れた土器を利用して製作されています。

一ノ渡遺跡は、配石遺構や多量の土製品や石製品があることから祭祀的な性格の遺跡と推定されます。

註釈

註一　湛水予定地とは、ダムの水を貯めておく場所のことです。一ノ渡遺跡が所在していた場所は、現在は浅瀬石川のダムの底に沈んでいます。

（四）　石名坂遺跡（図12）

石名坂遺跡では、黒石市では数少ない縄文時代晩期の遺跡です。石名坂遺跡から出土した遺物は、青森県立郷土館の風韻堂コレクションで見ることができます。

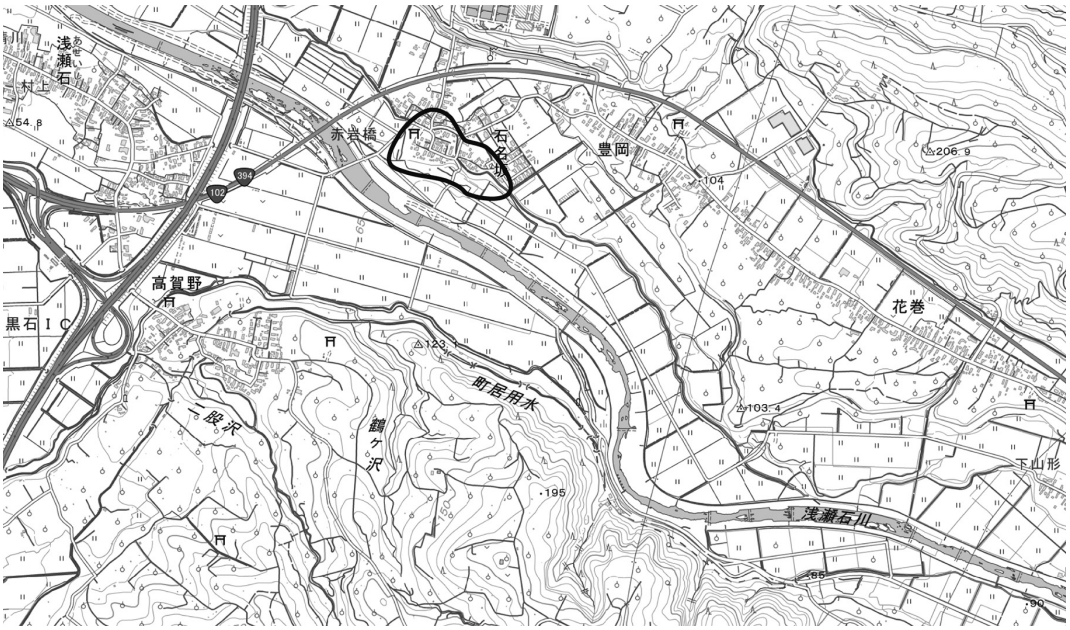

図12　石名坂遺跡位置図（図中〇位置）

風韻堂コレクションは、青森市在住の大高興氏（註一）が寄贈した収蔵品の一部を展示しているもので、寄贈された収蔵品の中に、石名坂の遺物（写真49）が含まれています。その内訳は、浅鉢三点、深鉢一点、壷十点、皿二点、台付鉢一点、石皿一点、石刀一点です。

黒石市教育委員会では、昭和六十一年度に石名坂遺跡内で宅地造成が計画されているため発掘調査を実施し、記録保存することにしました。

発掘調査は、昭和六十一年八月二十一日から八月三十日まで行われました。発掘調査の結果、竪穴遺構二基、土坑跡十基、溝状遺構二条、カマド状遺構三基が発見され、縄文土器、石器、土製品、土師器（註二）、古銭などが出土しています。

出土遺物のうち、縄文土器は、大部分が破片

でしたが、注口土器二点（写真50）が出土しています。土製品の中に、中空土偶の頭部一点が含まれています。

発見された遺構や遺物から、石名坂遺跡は縄文時代と平安時代の集落跡であることがわかりました。また、石名坂遺跡は中世の城館であることから、縄文時代から現在に至るまで環境の良い場所であることがわかります。

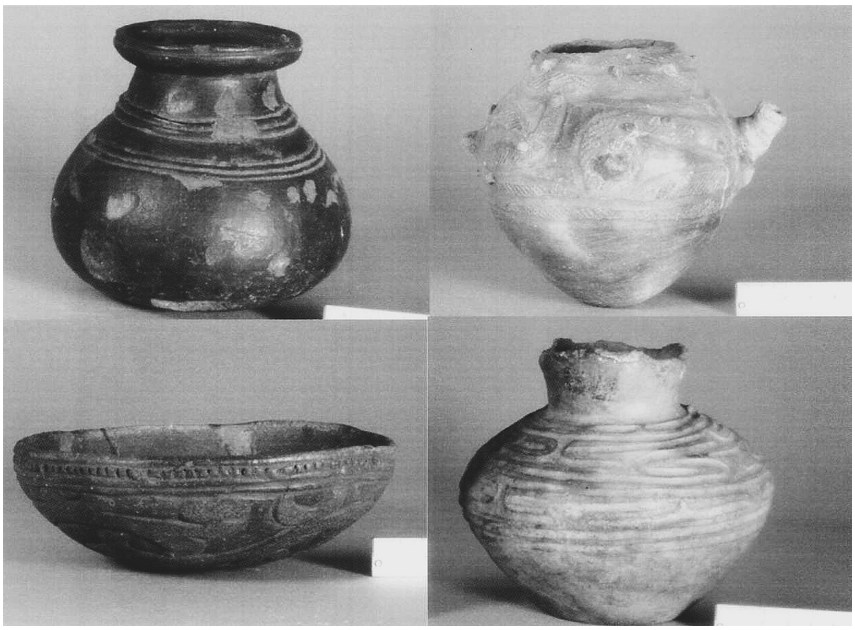

写真49　青森県立郷土館・風韻堂コレクション・石名坂遺跡出土遺物一部

註釈

註一　大高興氏は、青森医学専門学校（弘前大学医学部の前身）を卒業後、弘前大学医学部助教授や黒石保健所長を務め、昭和四十六年（一九七一）、青森市に内科医院を開業し、昭和六十年から平成六年（一九九四）までは国立療養所松丘保養園の内科医長も務めていました。大高氏の知人の影響もあり医療関係の仕事の傍ら、青森県内外から出土した縄文時代の土器や石器などを収集と調査を行い、全国的にも知られていた人物でした。大高氏は収集した遺物を自宅の「風

写真50　石名坂遺跡・注口土器２点

韻堂」と名付けた収蔵庫に保管していましたが、その収蔵品の点数は一万一〇〇〇点以上に及びます。そして、青森県立郷土館が開館する際に、青森県の文化遺産とした県民のため役立ててほしいとの願いからすべての収蔵品を寄贈しております。大高氏の寄贈した資料は、県重宝に指定された亀ヶ岡遺跡の出土品をはじめ、貴重な資料が多く学術的にも評価されています。県立郷土館では、これらの資料を大高氏の収蔵庫の名前に敬意を表して「風韻堂コレクション」と呼ぶ特別展示室を設けました。「風韻堂」の名前は、棟方志功（むなかたしこう）が大高氏を訪れたときに古代人の心に思いを寄せて名付けたと言われています。

註二　土師器は、古墳時代から平安時代にかけて作られた素焼きの土器のことを言います。縄文式土器、弥生式土器と異なり文様がつけられていないのが特徴です。

（五）　長坂（ながさか）（一）遺跡（いせき）（図13）

長坂（一）遺跡は、黒石市大字上十川（くろいししおおあざかみとがわ）地区（ちく）に所在しています。この場所

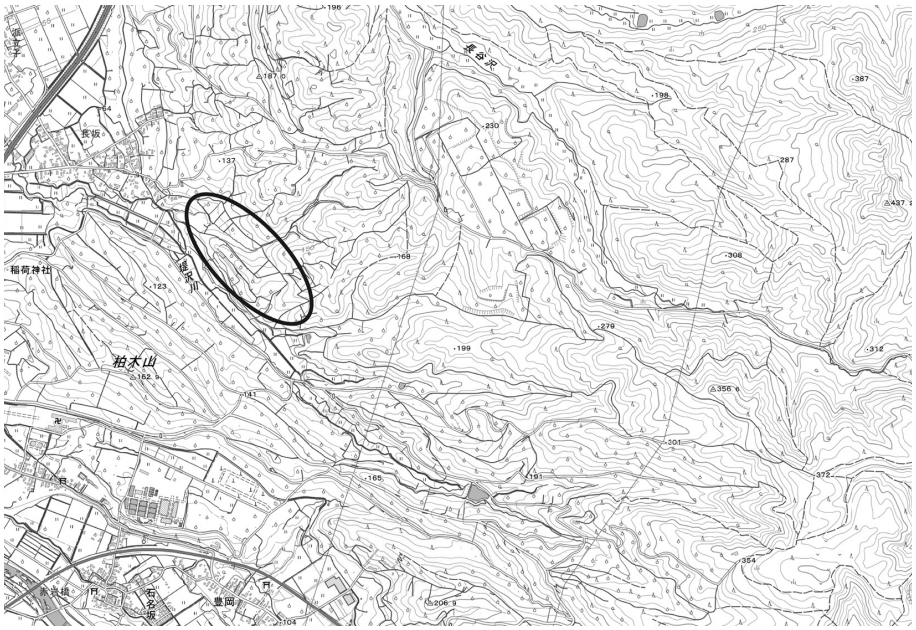

図13　長坂遺跡位置図（図中○位置）

は、南八甲田の裾野に広がる標高が百三十mから二百mの比較的緩い傾斜の丘陵地が形成されているところです。この長坂地区は、長坂（一）遺跡以外にも多くの遺跡が分布しており、縄文時代からヒトが住みやすい環境の良い場所でした。

長坂（一）遺跡は、昭和五十九年度と平成九年度に発掘調査を実施しています。

昭和五十九年度の発掘調査は、果樹園の土壌改良造成に伴い九月十日から九月十七日まで行われました。発掘調査の結果、土坑跡七基、配石遺構二基、埋設土器遺構一基が発見され、縄文土器、石器、土製品、石製品が出土しています。

遺構の中で特に特徴があるのは、埋設土器遺構です。埋設土器遺構というのは、土器の大きさに穴を掘り、その穴に土器（写真51）を埋めたものです。

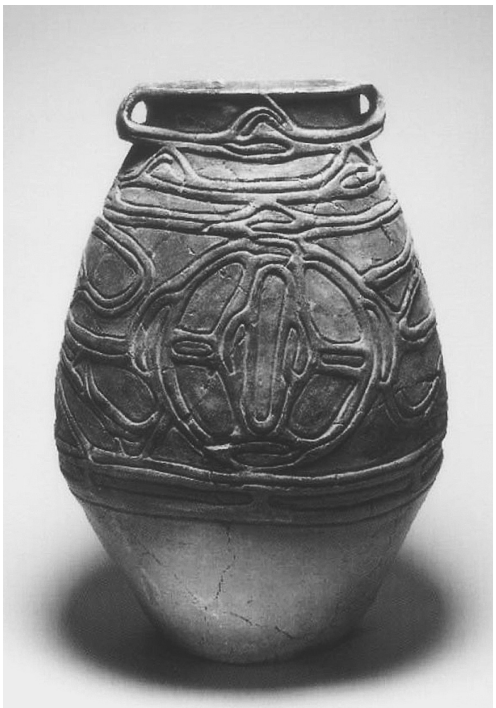

写真51　長坂遺跡・甕棺土器

土器は、比較的大きい深鉢型の土器で大きさは、高さが五十㎝、土器の口縁部の直径が二十四㎝、胴部の最も膨らんでいる部分の直径が三十七㎝、底の直径が十八㎝です。土器の中に拳大の礫石一個が混入していました。土器の表面には、幾何学的文様が付けられており、全体に赤色顔料で着色しています。また、土器の上に別な土器が被さった状態で出土しています。この土器の大きさは、上の直径が四十二㎝、高さが五㎝、底の直径が十六㎝であり、皿状の土器です。また、土器の外側全面が磨かれていて、出土した状況から蓋として使われたと思われます。

この土器は、土器棺と呼ばれています。土器棺というのは、死者を埋葬し、一定期間が経過した後に取り出した遺骨を洗い清めてから、納骨する土器のことです。縄文人の死生観を考えるうえで興味深い埋葬法です。

長坂遺跡から出土した土器は、縄文時代後期初頭に位置づけられる土器

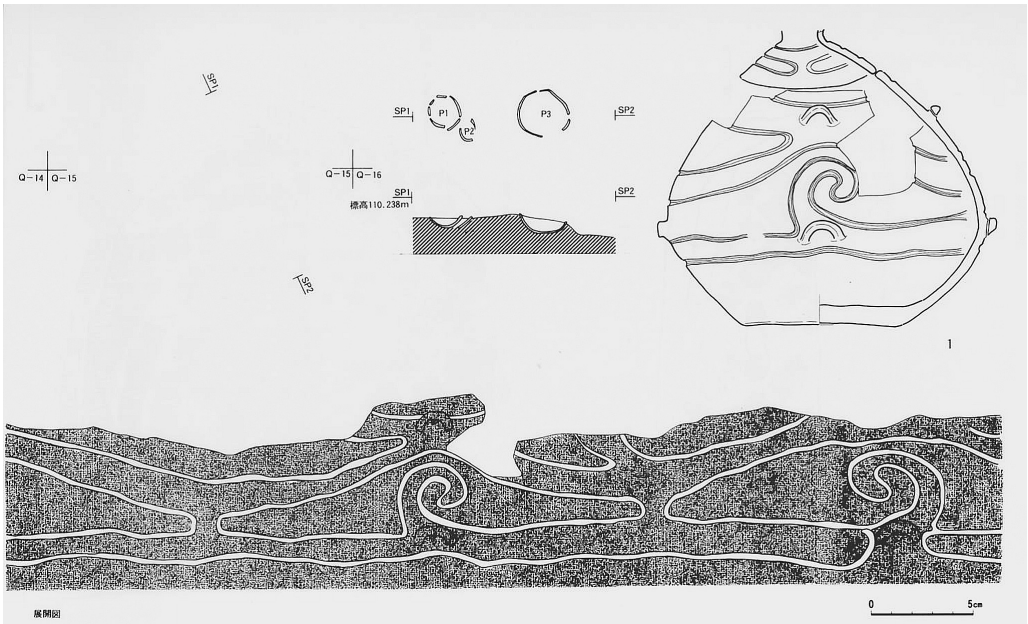

図14　長坂遺跡・切断蓋付土器出土状況平面図・土器実測図

であり、縄文時代のお墓を考える上で貴重な資料の一つです。

平成九年度の長坂遺跡の発掘調査は、県営緊急畑地帯総合土地改良事業に伴い六月二日から十月三十一日まで行われました。発掘調査の結果、竪穴住居跡十七棟、石囲炉一基、土坑跡三十七基、埋設土器遺構二基が発見され、縄文土器、石器、土製品、石製品が出土しています。

この時の発掘調査でも埋設土器遺構が発見されています。この発見された埋設土器遺構は、壺と浅鉢が並んで出土しています。壺は、朱塗の切断蓋付土器（図14）です。切断蓋付土器というのは、土器の上の部分を輪切り状に切断し、切断した部分を蓋状にして使用するものです。土器の大きさは、高さが十四㎝、底の直径が八

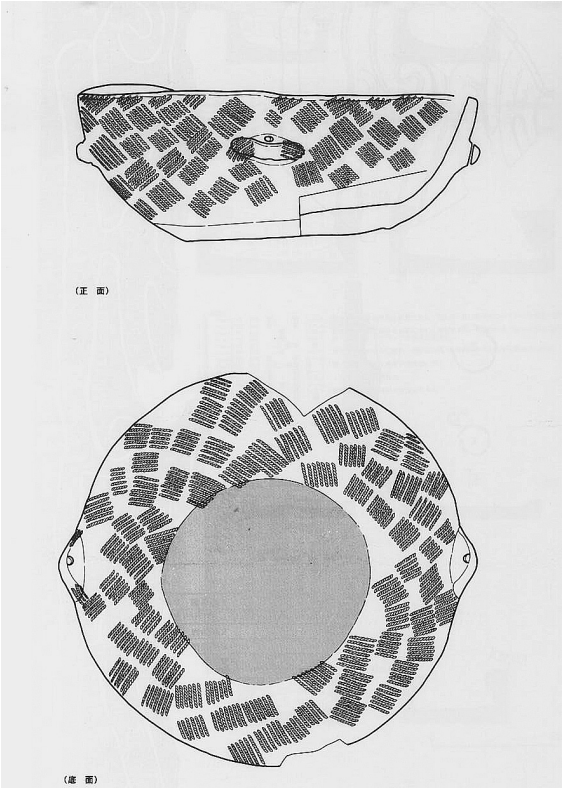

図15　長坂遺跡・皿型土器実測図

cm、胴部の最も膨らんでいる部分の直径が十七cmです。また、土器の肩の部分と最も膨らんでいる部分に把手（とって）が付いて、高さ十三cmの部分から切断されています。切断蓋付土器が作られる理由はわかりませんが、祭祀的な土器であり、霊魂（れいこん）が再び戻ってくるようにという願いからこのような土器が作られたのではないかとも考えられます。

もう一つの浅鉢（あさばち）は、皿型の土器（図15）で大きさは、口縁部（こうえんぶ）の直径が二十一cm、高さが八cm、底の直径が十二cmです。胴部の中央に穴の開いた把手があり、また、土器の内側にスス状の付着物が見られることから、この土器は吊るされて使用された灯明皿（とうみょうざら）（註一）であると考えられます。

長坂（一）遺跡の発掘調査では、埋設土器遺構などが多量に発見されていますので、墓域（ぼいき）（註二）であると考えられています。墓域の状況から長坂地区には、かなり大規模な縄文時代後期の集落跡が存在する可能性があります。

注釈

註一　灯明皿とは、油に灯心と呼ばれるひも状の芯を入れ、それに火を付けて、明かりを灯すための皿状の器のことです。

註二　墓域とは、現在でいう墓のある空間のことです。縄文時代の墓域についてはまだわからないことが多いのですが、三内丸山遺跡の発掘調査から縄文時代には、集落跡、おまつりの場、貯蔵の場、ゴミ捨場、墓場など集落の中が区分けされていたことが分かっています。そして、縄文時代には、住居の近くにお墓を置いているようです。そのお墓も大人用と子供用のお墓が区別されるのも大きな特徴です。

第四章　弥生時代

図16　弥生町遺跡位置図　∴弥生二丁目遺跡

一　弥生時代とは

縄文時代が終わる紀元前四世紀頃には、朝鮮半島には大陸から移り住んだ人々によって水田による稲作が広まっていました。朝鮮半島に住んでいた人々は、稲作文化を九州北部に伝え、北九州で生活していた縄文人が稲作文化を受け入れたことで弥生時代が始まります。

稲作文化は、紀元四世紀ごろには北九州から西日本や東日本にまで広がり、次第に北海道をのぞく日本列島の大部分の地域まで稲作が広まっていきました。

この時代を弥生時代と言います。明治十七年（一八八四）に東京都本郷区向ヶ岡弥生町（現在、

東京都文京区弥生（図16）の貝塚から発見された土器が「弥生式土器」と呼ばれていたことから、「縄文時代」の次の時代を「弥生時代」と呼ぶようになりました。

弥生時代がどのような時代であったのかについては、これまでの発掘調査の成果や中国の歴史書から学ぶことができます。

稲作文化が伝わってくると生活も急速に変化していきました。小さな国々ができ、人々を支配する有力者（豪族とも呼ばれていたそうです）や王が現れました。中国の歴史書である「漢書」（註一）には紀元前一世紀頃、倭には一〇〇余りの国があることが書かれています。「倭」というのは日本のことで、中国や大陸の人たちは、日本列島を「倭」と呼んでいました（註二）。

また、同じ中国の歴史書の「後漢書」（註三）には、一世紀の半ばに現在の福岡平野にあった倭奴国の王が後漢に使いを送り、皇帝から金印を授けられてと書かれています。江戸時代天明年間に筑前国那珂郡志賀島（註四）で発見さ

図17　「漢委奴国王」の印

図18　卑弥呼　イメージ画

れた「漢委奴国王」（註五）と刻まれた金印は、その時のものと考えられています（図17）。

さらに、「魏志倭人伝」（註六）によると、邪馬台国の女王卑弥呼（図18）が、倭の三〇余りの小さな国々を治めていたことが書かれています。一世紀から二世紀頃の倭国は、長い間争いが続いていたため卑弥呼という巫女（註七）を国々の王にすることによって争いが収まり、邪馬台国が成立しました。邪馬台国が成立後は、国を治めるだけでなく、当時の中国である魏の都に使いを送り、皇帝から「親魏倭王」という称号と金印が与えられ、銅鏡一〇〇枚などの送りものを受けていたと言われています。

弥生時代の年代については、これまで紀元前四世紀頃から三世紀中頃あるいは後半までとされてきました。しかし、発掘調査の成果から、弥生時代のはじまりがさらに五〇〇年ほどさかのぼり、紀元前一〇〇〇年頃という説も出てきています。

【補足説明：卑弥呼と邪馬台国】

卑弥呼は、邪馬台国の女王として教科書や歴史書に書かれていますが、いまだに謎の多い人物です。

卑弥呼の出生等についてはわかっておりませんが、鬼道と呼ばれる呪術的宗教を行う巫女として知られています。国を治めるときでも本人は人前に姿を現さず、弟だけにしか姿を見せなかったそうです。

ところで、邪馬台国はどこにあったのでしょうか。「魏志倭人伝」に書かれている行程の距離と方角の解釈から九州説と近畿説がありますが、いまだに解決されていません。九州説では、福岡県糸島市を中心とした地域、北部九州広域説、宮崎県西都市の西都原古墳群などがあります。そのため、近年、九州王朝説を唱える学者もいます（註八）。

近畿説では、琵琶湖畔、大阪府などがありますが、これまでの発掘調査などから奈良県桜井市三輪山近くにある纒向遺跡も候補に挙げられています。

邪馬台国を治めていた卑弥呼ですが、二四八年に亡くなったと言われています（註九）。亡くなった死因については不明ですが、邪馬台国と対立関係

写真52　卑弥呼の墓と推定されている箸墓古墳

にあった狗奴国の男王卑弥弓呼（註十）に殺されたという説もあります。

卑弥呼が亡くなると大きな墓が造られました。「魏志倭人伝」には、「・・・径百余歩の墓に葬られた・・・」と書かれています。当時の一歩は一・四四mであることから、卑弥呼の墓は径一四四mと言われています。墓の形については、「径」という表現から円墳であろうと考えられていますが、弥生時代に造られていることから前方後円墳の可能性も考えられています。

このようなことから卑弥呼の墓は、奈良県桜井市の箸墓古墳（写真52）やホケノ山古墳、福岡県苅田町の石塚山古墳、福岡県糸島市の平原遺跡から発見されている墳墓、福岡県久留米市の祇園山古墳などが候補に挙げられています。しかし、いまだに卑弥呼の墓はわかっていません。

卑弥呼が亡くなってから邪馬台国は、男王が後継に立てられました。しかし、国を治めることができなかったので、卑弥呼の血縁関係のある「壹與」（註十一）が女王になることで国が収まりました。壹與女王は二六六年に晋の武帝に使者を送り込み、貢ぎ物とよばれる御土産を差し上げている人物でもあります。しかし、五世紀の初めに倭の五王が貢ぎ物を差し上げるまで、中国の歴史の中に倭や倭国に関する文書はありません。しかし、近年、西暦三六六年頃のヤマト王権の仲哀天皇・神功皇后の九州遠征により邪馬台国末裔は最終的に滅亡したのではないかと考えている歴史学者もいます。

また、卑弥呼は、一般的には「ヒミコ」と呼ばれていますが、日本の歴史書である『古事記』や『日本書記』に卑弥呼は登場しないことから別な名前で呼ばれていたと考えられています。また、中国の歴史書に「卑弥呼」の名前は出てきますが、日本の歴史書に「卑弥呼」の名前は出てこないことから、卑弥呼は天照大神であった説や倭迹迹日百襲姫命（註十二）であった説などがあり、いまだに謎の多い人物です。

註釈

註一 漢書とは、二十四史の一つです。二十四史とは、中国の古代から元までの歴史を二十一部にまとめた二十一史の歴史書があります。その二十一史に旧唐書、旧五代史、明史を加えた中国歴代の歴史書があり、それを二十四史といいます。この二十四史の中に八二年頃に書かれた前漢の歴史書があります。それを「漢書」といいます。

註二 「わたしたちの黒石」でも書いているとおり、中国の歴史書では、日本のことを「倭」と書いており、中国や大陸の人たちは、日本のことを「倭（やまと）」と呼んでいました。広辞苑には、「日本」という言葉は、大化改新の頃、東方すなわち日の本の意から「日本」と書いて「やまと」と読み、奈良時代以降、「にほん、にっぽん」と音読するようになりましたと書かれています。大宝三年（七〇三）に遣唐使粟田真人が中国を訪れたときに「日本国使」と名のり、また、中国の歴史書でも「倭国伝」が「日本国伝」に変わっていますので、「日本」という言葉は、八世紀初頭から使用されていたと考えられます。「にほん、にっぽん」の読み方については、法的な根拠はありませんが、特にニッポンと読ませている以外は、ニホンと読まれているようです。

註三 後漢書も二十四史の一つです。後漢の歴史的な出来事を書いた歴史書です。四三二年に完成しています。後漢書の中にある「東夷伝」には、倭に関する出来事が書かれています。

註四 志賀島は、福岡県福岡市東区に所在しています。志賀島で「漢委奴国王」が発見されていますが、具体的な場所はわかっていません。

註五 「漢委奴国王」は、「かんのわのなのこくおう」と読みます。金印が発見された江戸時代には、「漢委奴国王」の「委奴国」は、「伊都国」ではないかと見なされて

おり、「かんのいとのこくおう」と読まれていました。このように読まれていた理由は、中国の歴史書である『魏志倭人伝』の中に「・・・東南へ陸を五〇〇里行くと伊都国に至る・・・」という表記から解釈されていたようです。「委奴国」は、福岡県糸島市と福岡市西区の一部と考えられています。しかし、明治時代になると、歴史学者である三宅米吉が、「委」は「倭」の略字であり、「委奴国」は「倭奴国」であると唱えました。そのため、「漢委奴国王」を「漢の倭（委）の奴の国王」を読ませるようにしました。それが現在でも通説になっており、「かんのわのなのこくおう」という読み方です。「奴国」は、現在の福岡県福岡市と春日市に存在していただろうと那珂川と考えられています。

註六　「魏志倭人伝」は、「魏志倭人伝」という書物があるわけではありません。中国の歴史書『三国志』の中にある「魏書（魏志とも呼ばれています）」の第三〇巻に「烏丸鮮卑東夷伝」があります。その中に、倭人に関わる条があり、その条の通称が「魏志倭人伝」と呼ばれています。

註七　巫女とは、一般的に日本の神に仕える女性のことを言います。日本神話の中に天照大神がでてくる物語があります。天照大神の弟である素戔嗚尊（すさのおのみこと）が乱暴であることから天の岩戸に隠れたため天地が真っ暗になり、昼がなくなります。そのため八百万の神々が女神である天鈿女命（あまのうずめのみこと）に相談しました。天鈿女命は岩戸の前で踊り、宴を行い、このことから天照大神は天の岩戸から出ることができました。これが、「天の岩戸」という日本神話の一つです。そのため、この神話に出てくる天鈿女命が巫女の起源と言われるようになりました。巫女の主な仕事は、江戸時代までは、神楽を行ったり、祈祷や占いをしていたそうです。明治時代以降は、神社で神事の奉仕をしたり、神職の手伝いを行ったりするようになりました。現在では、お正月の初もうでの時に白い小袖の着物に赤い袴を着ている女性が巫女

として知られているようです。

註八　九州王朝説を唱えたのは、古田武彦です。古田武彦は、親鸞の研究者ですが、そのほかに古代史の研究者として知られています。特に邪馬台国と卑弥呼の研究に独自の考え方を示しており、学界や一般市民からも評価されていますが、また、多くの研究者と論争を繰り広げてきました。古田武彦が亡くなった後も支援者たちによって「古田武彦古代史研究会」が活動を行っています。古田の代表的な著者は、『邪馬台国はなかった』、『失われた九州王朝』など多数の古代史に関する本があります。

註九　卑弥呼が亡くなった年代については、正始八年（二四七）に邪馬台国からの使いが狗奴国との争いを報告する記述が、「魏志倭人伝」の中にあり、「・・拝仮難升米為檄告諭之卑弥呼以死　大作冢　径百餘歩　殉葬者奴婢百餘人・・」と書かれています。そのため、卑弥呼が亡くなった年は、二四七年、あるいは二四八年と推定されています。また、この文章の中に「・・卑弥呼以死・・」という文字が書かれています。これを「死スルヲ以テ」と読むと、「死んだので」、あるいは、「すでに死んだ」という意味になるので、卑弥呼はすでに死んでいたと考えられます。この場合は、死因はわかりません。一方、「ヨッテ死ス」と読むと、「だから死んだ」ということになり、この前に書かれている文章から、狗奴国の卑弥呼との争いから卑弥呼は亡くなったとも考えられます。

註十　「東夷伝倭人の条」には、狗奴国は、邪馬台国と対立している倭人の国であると書かれています。狗奴国は、「くなのくに」と読まれていますが、「くぬのくに」、「くぬこく」とも読まれています。狗奴国の位置は、「魏志倭人伝」から邪馬台国の南側に位置していると推定されていますが、正確な位置については分かっていません。卑弥弓呼は、狗奴国を治めていた人物です。卑弥弓呼は、「ひみここ」と

読みますが、「ひめくこ」、「ひめこそ」とも読まれています。

註十一　壹與は、「台与」とも書きます。読み方は、「とよ」、あるいは、「いよ」と読みます。壹與は、本文に書いているように卑弥呼と血縁関係にある女性ですが、卑弥呼と同じように謎の多い人物です。

註十二　倭迹迹日百襲姫命は、『日本書紀』や本居宣長の『古事記伝』では、百襲姫とも呼ばれています。百襲姫は、第七代孝霊天皇と妃の倭国香姫の間に生まれた皇女で、巫女的な女性としても知られています。『日本書記』によれば、百襲姫は、大物主神の妻になりました。大物主神は、日本神話に登場する神様の一人です。国の開拓の成功と繁栄、安定と平和、病気回復、縁結び、そして商売繁盛に御利益があることで知られており、大物主神を祀る三輪山にある大神神社には、今日も、多くの参拝者が訪れています。

二　弥生時代のくらし

それでは、弥生時代はどのようなくらしをしていたのでしょうか。縄文時代と同じようにこれまでの発掘調査の出土例や調査研究の成果から、食事、住居、道具、祭祀、そして弥生人について述べていきます。

（一）　弥生時代の食事（図18）

弥生時代は、水田が作られ、稲作が始まります。弥生時代の遺跡の発掘

調査では、米のほかに小麦、アワ、ヒエ、キビ、小豆などの炭化穀物が発見されていますので、雑穀の栽培も行われていたことも知られています。

米をはじめ、雑穀がどのようにして食べられていたのかは判っておりません。弥生時代の遺跡の発掘調査では、甕形土器が発見されています。そして、その甕形土器の内部には炭化物が付着しているため、水を入れて炊いていただろうと推測されています。食べ方については、鳥取県の青谷上寺地遺跡から木製の匙が多数発見されていることから雑炊のようなものにして食べていたのではないでしょうか。白米の御飯を食べるのは、奈良時代になってからで、特権階級の人たちと考えられています。

また、弥生時代の貝塚から、シカ、イノシシなどの獣骨をはじめ、アワビ、カキ、マダイ、マグロの魚介類、カモ、キジの野鳥類の骨など

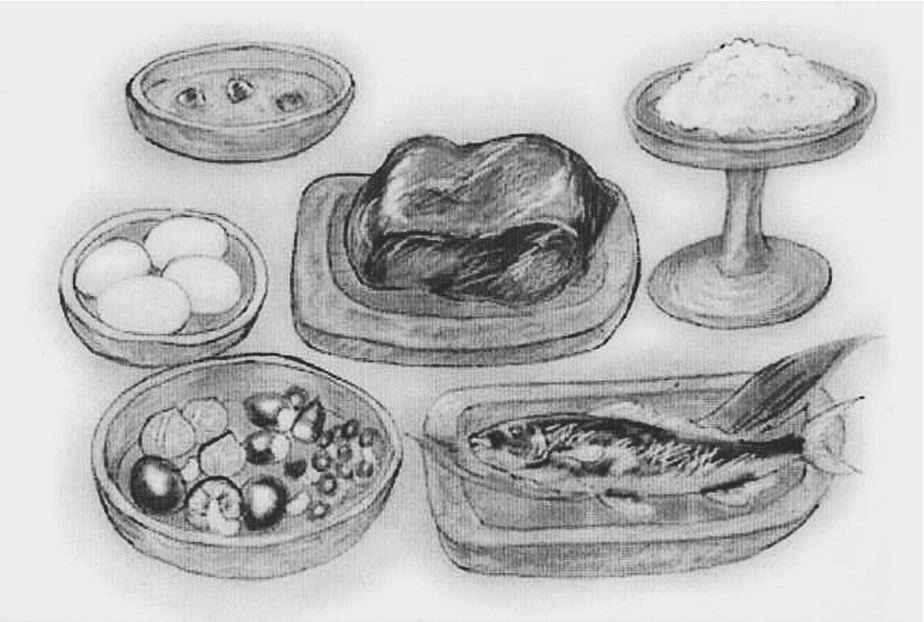

図19　弥生時代の食事・イメージ

も発見されています。このことから豊富な副食も食べられていたようです。

これまでの発掘調査の成果などから弥生時代には、主に稲作が行われていた地域と縄文時代からの狩猟採集生活をしながら稲作を行っていた地域があることが知られています。縄文時代からの狩猟採集生活をしながら稲作を行っていた地域では、縄文時代からの食事をしながらコメも食べていたと考えられています。

いずれにしても、稲作が始まると縄文時代に比べ、食生活が豊かになっていきます。

（二）　弥生時代のムラ

弥生時代になり、稲作がおこなわれるようになるとムラとムラの間に生産力の差が生まれるようになります。こうして次第に環濠集落（註一）や高地性集落（註二）が形成されていったものと考えられています。

環濠集落は、かなりの広さを持つ大規模な集落を形成されることで知られています。太平洋側では、千葉県佐倉市付近まで、日本海側では新潟県

村上市までが北限とされており、東北地方では弥生時代の環濠集落は発見されていません。また、高地性集落は、弥生時代には近畿地方に形成されていきますが、古墳時代には西日本と、北陸地方にも高地性集落が形成されていきます。

集落の中で生活する人々は、縄文時代と同じように竪穴住居跡に住んでいました。この竪穴住居跡のほかに、米を貯蔵するための倉庫として掘立柱の建物が建てられるようになります。掘立柱の建物跡は縄文時代にもありますが、弥生時代になると倉庫を目的にした建物跡がよく造られるようになります。

写真53　吉野ヶ里遺跡・主祭殿

住居や倉庫の他に、吉野ヶ里遺跡の北内郭の主祭殿（写真53）のように祭祀的な性格を備えた大規模な建物も集落の中心には存在していたようです。

また、鳥取県稲吉角田遺跡出土の土器には太陽、船に乗ったシャーマン、鹿、銅鐸（註三）のよ

うなものが描かれています。また、これらの絵といっしょに高い柱を持つ物見櫓のような建物や高さのある倉のような建物も描かれています。奈良県磯城郡田原本町の唐古・鍵遺跡出土の土器には重層の建物が描かれていました。こうした土器の絵から、弥生時代には高さのある建物が建てられるようになります。このような高さのある建物は神聖であると思われます。

そして、このような建物を建てるためには、頑丈な縄で木材と木材を縛り、柱や梁の組み合わせで建てなければなりません。このことから、弥生時代の建築技術はかなり高度であっただろうと推測されます。

青森県の弥生時代の集落は、西日本や関東地方に比べると小規模な集落です。例えば、八戸市の風張（一）遺跡では、おおよそ二〇m×三〇mの広場の中に弥生時代前期末から中期前葉の竪穴住居跡が七軒前後、六ケ所村の大石平遺跡からは弥生時代中期中葉以降の竪穴住居跡が六軒発見されています。このことから、青森県では大きな集落でも七軒前後、普通の集落では、三軒前後の小規模の集落が形成されているようです。弥生時代前期から中期前葉の竪穴住居跡（写真54）は、直径八m前後の大型住居跡であ

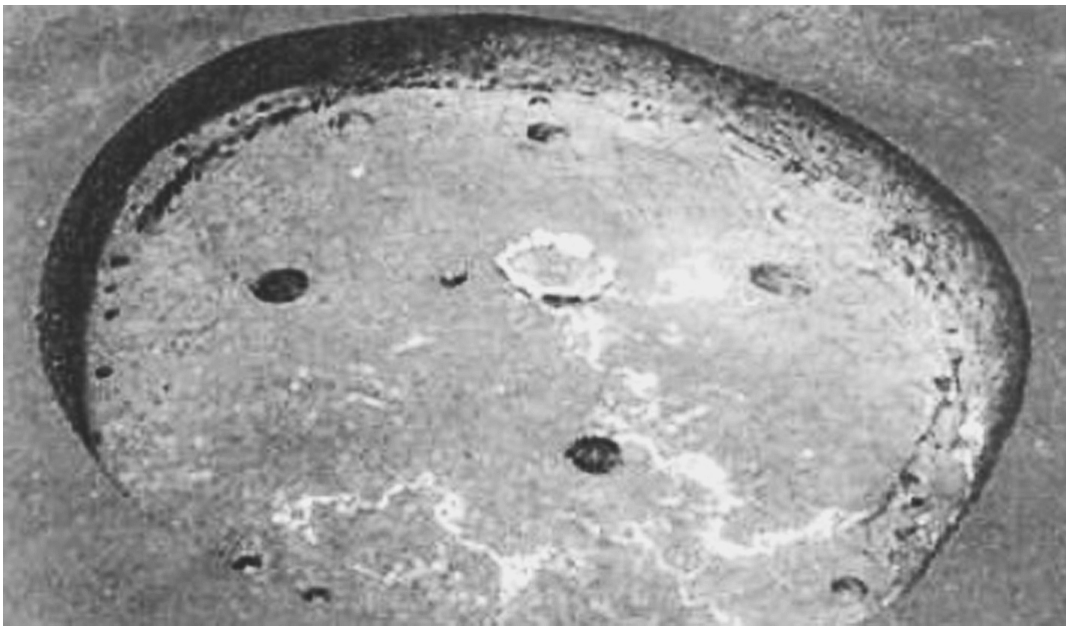

写真54　弥生時代竪穴住居跡・八戸市牛ヶ沢（4）遺跡

り、石囲(いしがこ)いの中に土器が埋設された炉が設置されているなど一定の規格性を持ちながら造られているようです。そして、これは青森県だけではなく、岩手県や秋田県にもみられることから、東北地方北部では比較的安定した社会が営まれていただろうと考えられています。さらに、集落は縄文時代には丘陵地に形成されていますが、弥生時代になると丘陵地のほかに、低湿地(ていしつち)やその周辺の微高地(びこうち)に形成されるようになります。稲作に適した土地を求めて集落が営まれるようになったようです。

注釈

註一　環濠集落というのは、集落の周りに、堀を造っている集落のことを言います。水稲稲作とともに大陸から伝わってきました。日本では、弥生時代から中世まで環濠集落は作られていきます。環濠集落が作られる目

写真55　田舎館式土器

的は、集落を守るために作られたと考えられます。青森市浪岡にある高屋敷館遺跡は、平安時代の環濠集落として知られており、平成十三年一月に国の史跡に指定されています。

註二　高地性集落というのは、平野などを見渡すことができる山頂や小高い丘陵地に作られる集落の故地です。弥生時代中期、後期に作られるようになります。高地性集落が作られる目的は、軍事的な役割を持たせるために作られたものと考えられています。青森県では、弘前市小友遺跡、大鰐町砂沢平遺跡などが知られています。

註三　銅鐸については、「（四）　弥生時代の祭祀」で詳しく書いてありますので、そちらを参照してください。

（三）　弥生時代のいろいろな道具

弥生時代は、縄文時代と同じように土器や石器も使われています。

土器（写真55）は、やや高温で焼かれたため赤（せき）

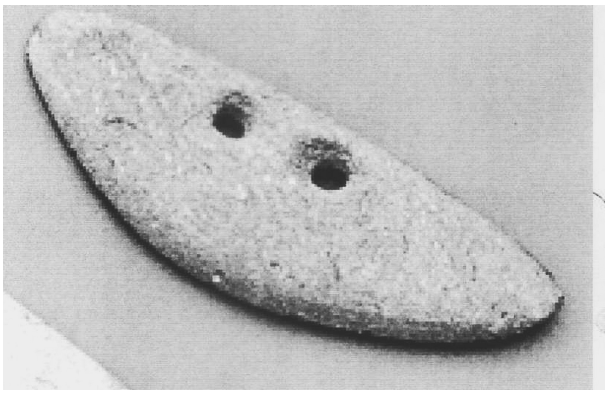

写真56　弥生時代・石包丁

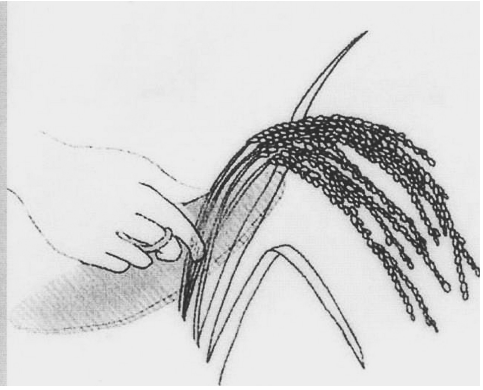

図20　石包丁使用方法

褐色をした薄手で硬めの土器が作られるようになります。しかし、縄文時代のようにあまり縄目の文様は付けられないのが特徴です。土器の種類も縄文時代と同じように深鉢型土器、浅鉢型土器が作られますが、このほかに壺型土器や高坏が作られるようになります。壺型土器は縄文時代にも作られていましたが、米作りが朝鮮半島を経て伝わってくると壺型土器や高坏も伝わってきました。壺型土器は米などを貯蔵するために、高坏は、米をはじめその他の食物を盛るために作られました。

石器は、稲作と一緒に朝鮮半島を起源とする磨製石斧や石包丁（写真56）が伝わってきました。磨製石斧は、木材を伐採し、それを細かく加工するため、石包丁は、稲の穂を摘み取る（図20）ための道具です。磨製石斧は、縄文時代にも使われていましたが、さらに性能が良くなります。

土器や石器のほか朝鮮半島から鉄器や青銅器が伝わってきました。鉄器は、伝わってきた当初は農工具として使用

されていましたが、次第に農工具のほかに鉄鏃や槍などの武器も作られるようになりました。また、青銅器は、銅矛、銅剣などの武具や銅鉋などの工具として使用されていました。しかし、青銅器で作られた武具は次第に古墳の副葬品などや祭祀の道具として使用されるようになりました。

また、磨製石器のほかに青銅器や鉄器などの金属器も伝わりました。もともと武器であった銅剣や銅矛も、日本では銅鏡や銅鐸と同じように主に祭りのための道具として使われるようになりました。

写真57　滋賀県琵琶湖底から発見された銅鐸

（四）弥生時代の祭祀

弥生時代の道具にも出てきましたが、青銅器や鉄器などの金属器も伝わりました。鉄器は、武具として鉄剣なども作られますが、農具として鍬や鋤なども作られるよう

図21　聞く銅鐸・見る銅鐸『日本最大と最小の銅鐸　大岩山と近江の銅鐸』から転載

になります。青銅器は、主に銅鐸や銅鏡、銅剣、銅矛などが作られるようになります。この中で銅鐸と銅矛は、教科書をはじめ歴史の本にもよく出てくる貴重な歴史的な遺物です。

銅鐸（写真57）は、三〇〜四〇㎝の小型の銅鐸から一mを超す大型な銅鐸まであります。その形が手持ちの鐘（かね）のように見えることから楽器のようなものと考えられていました。しかし、近年、兵庫県の淡路島で発見された銅鐸から吊るすための紐が確認されたことから吊り下げて使用されていたこともわかってきました。そのため、銅鐸は、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」に移り替わっていくようです。「聞く銅鐸」も「見る銅鐸」も祭祀用の道具として使用されたようです。

また、銅矛は朝鮮半島から北九州に伝わりました。中国や北朝鮮半島では、槍（やり）のように突き刺すための武具でした。しかし、北九州に伝わってからは銅鐸と同じように祭祀用の道具として使用されたようです。

これまで、銅鐸は近畿地方から東海地方にかけて発見され、銅矛は北九州周辺から発見されていたため、「銅鐸文化圏」と「銅矛文化圏」という分け方がされていました。しかし、発掘調査が増えることで北九州から銅鐸が発見され、近畿地方や東海地方からは銅矛も発見されるようになりました。

このため、弥生時代には九州から近畿地方、東海中部地方の西日本と呼ばれて地域では青銅器などを使用した祭祀が行われていました。

青森県では、弥生時代の遺跡から土偶、石刀、石棒などが発見されています。また、クマを形取った土器や、ヒトを形取った石器なども発見されています。そのため青森県では縄文的な祭祀が継続されていたのではないかと考えられています。

弥生時代の墓は、縄文時代からあります土坑墓のほかに、墳丘墓をはじめ、周溝墓、甕棺墓、木棺墓、石棺墓なども造られるようになります。

この中で甕棺墓は、九州北部の地域に多い代表的なお墓のひとつです。最初は壺型土器をそのまま大型化した甕形土器が使用されていましたが、形が特徴のある甕形土器が作られるようになります。北日本においては縄

文時代の後期に甕棺が作られていますが、九州北部の地域で作られている甕棺との関連性については分かっていません。

また、木棺墓は、縄文文化にはなかったお墓であることから朝鮮半島から渡来した埋葬様式の一つと考えられています。そして、木棺墓は広く西日本地域で造られるようになります。周囲に四角い溝を持った盛り土のお墓を方形周溝墓と言いますが、その方形周溝墓の埋葬の部分に木棺墓が使用されるようになりました。

しかし、弥生時代の後期には、九州北部から西日本にかけて石棺墓が造られるようになると木棺墓は、次第に姿を消していきます。

東北地方のお墓は、縄文時代からの土坑墓が受け継がれていますが、大きな壺に遺骨を納める土器棺墓なども造られるようになります。青森県では、弥生時代のお墓は、大部分が土坑墓ですが、平川市の大光寺新城跡や五輪野遺跡、外ヶ浜町の宇鉄遺跡などからは土器棺墓も発見されています。土坑墓からは、副葬品として翡翠製の玉をはじめ、鉄器や石器なども発見されています。

（五）　弥生人（図22）

縄文時代から日本にいた人たちのことを「縄文人（じょうもんじん）」と呼びますが、それに対して、中国大陸や朝鮮半島を経て稲作文化を持って来て、そのまま日本に住みついた人々を「弥生人（やよいじん）」と呼びます。

弥生人については、北部九州地方の甕棺墓などから出土する人骨をはじめ、佐賀県の吉野ヶ（よしのが）里遺跡（りいせき）、山口県の土井ヶ浜遺跡から出土した人骨、また、西部九州や東日本から出土した人骨を調査研究した結果、明らかになってきました。弥生人の特徴は、顔が上下に長い面長の平たい顔で、鼻は小さく、一重まぶたであることがわかりました。そして、身長は、男性で一六四㎝位、女性で一五〇㎝位と推定されています。

縄文時代晩期から弥生時代にかけて中国大陸や朝鮮半島から少なからず人々が日本列島に渡

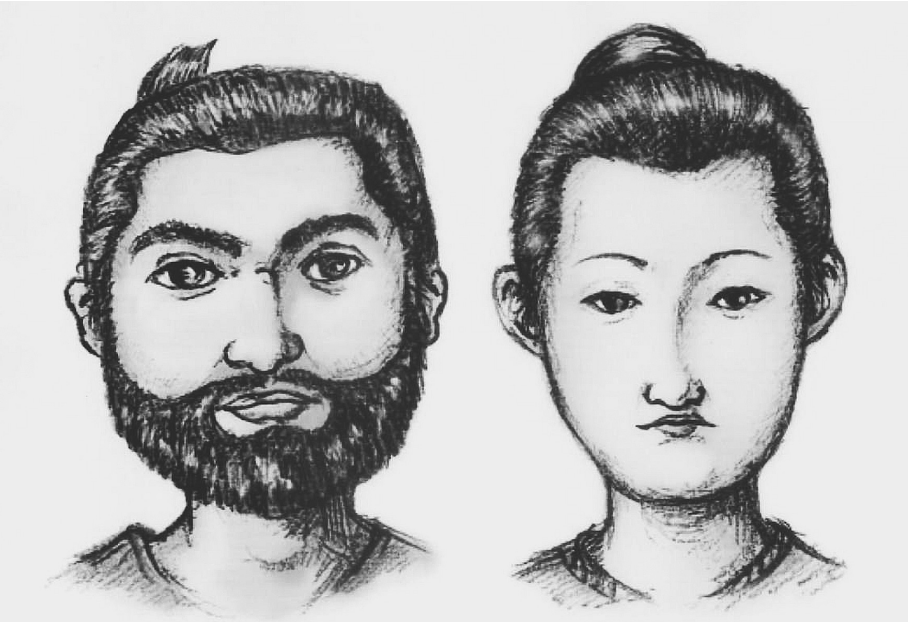

図22　縄文人（左）と弥生人（右）・イメージ像

来していました。その人たちは、青銅器の出土例から西日本を中心に交流していたであろうと考えられています。

三　青森県の弥生時代

写真58　昭和33年の垂柳遺跡発掘調査風景

（一）　青森県の弥生時代

昭和三十年代の考古学会では、本州最北端の青森県までは、稲作文化が伝わっていなかったとみていました。しかし、東北大学の伊東信雄教授だけは、稲作が青森県まで到達していたと考えていました。

昭和三十年初期、当時、田舎館村中学校の工藤正教諭は、田舎館村の垂柳遺跡から籾圧痕のある土器や炭化米を発見し、弘前市立博物館の館長であった成田末五郎に連絡しました。成田館長は、そのことを伊東信雄に報告し

ています。伊東信雄は、報告を受け、昭和三十三年に発掘調査（写真58）を行いました。発掘調査の結果、約五十個の弥生土器と二〇〇粒以上の炭化米を発見しました。その後、伊藤信雄は、青森県でも稲作が行われていたことを発表しています。

しかし、当時、考古学者の第一人者であった山内清男（註一）は、東北地方北部の弥生文化は、弥生式的な文物を多少取り入れた続縄文文化（註二）の生活をしていると主張していました。そのため、東北北部は、弥生文化ではなく、続縄文文化で成り立っていると考えられていました。

しかし、近年の発掘調査では、弥生時代の遺構や遺物が発見され（註三）、東北北部の弥生時代が解明されてきました。そして、それに伴い弥生時代の見直しが行われています。青森県の弥生時代の代表的な遺跡といえば、垂柳遺跡と砂沢遺跡です。

註釈

註一　山内清男は、日本の考古学者の一人です。特に全国の土器の年代をわかりやすく表した編年表を作成しました。また、縄文土器に付けられている紋様について、植物繊維を撚ったものを縄文原体と呼び、それを転がして文様が付けられていることを明らかにしました。北海道南部から東北地方北部において出土していま

す円筒土器の研究において最も功績のあった人物です。今の考古学者の中には、敬意を込めて「山内博士」と呼ぶ人もいます。

註二　続縄文時代とは、弥生時代から古代（こだい）にかけて稲作文化が及ばなかった地域を中心として狩猟・漁撈・採集経済で成り立っている時代である。

註三　青森県の弥生時代の遺跡は、主に津軽平野南部、下北半島、南部地方に分布しています。南部地方では、新井田川流域に数多くの弥生時代の遺跡があることが知られています。津軽平野南部には、田舎館村垂柳遺跡のほかに、高樋（三）遺跡、前川遺跡、平川市井沢（一）遺跡、五輪野遺跡、大光寺（四）遺跡など二十か所以上の遺跡が確認されています。

（二）垂柳遺跡（たれやなぎいせき）

垂柳遺跡は、昭和三十三年度に発掘調査が行われましたが、その後、昭和五十六年度、昭和五十七年度に国道一〇二号線バイパス建設に伴い発掘調査を行いました。昭和五十六年度は田舎館村教育委員会が、昭和五十七年度は青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を担当しています。

昭和五十七年の発掘調査は、調査面積が三二〇〇〇㎡でした。発掘調査の結果、遺構は、弥生時代の水田跡（すいでんあと）が六五六枚（写真59）、遺物は、炭化米、弥生式土器などが発見されています。垂柳遺跡の年代は、今から二二〇〇年前の弥生時代中期末です。

写真59　田舎館村垂柳遺跡・水田跡

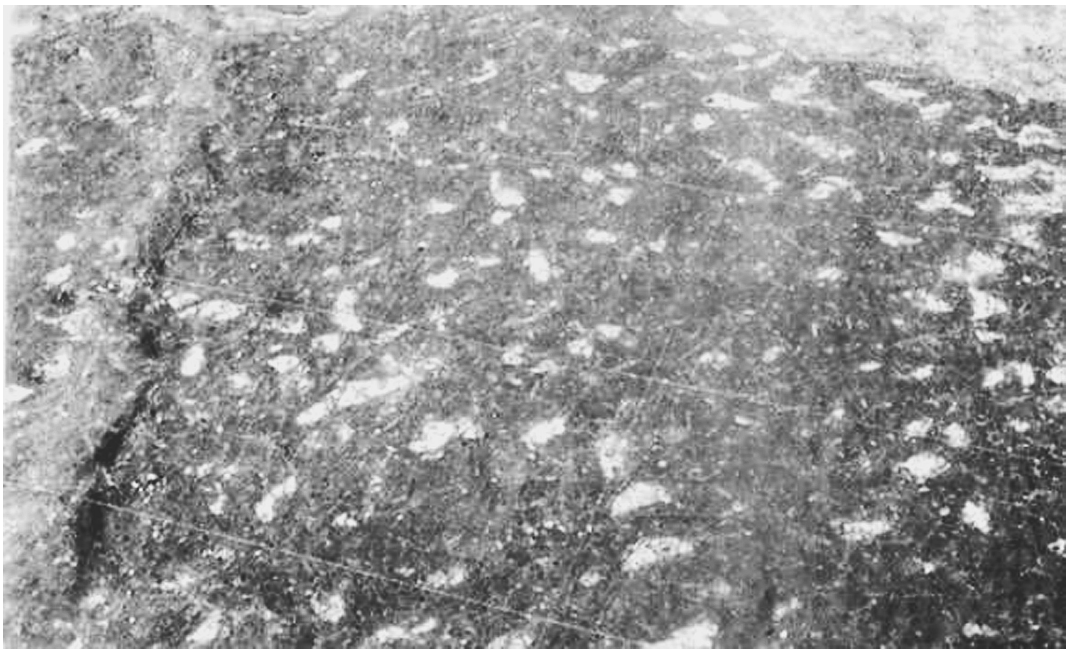

写真60　田舎館村垂柳遺跡・水田跡から発見された足跡

発見された水田の一枚の大きさは、一・一〜二十二㎡の比較的小さい規模であることがわかりました。また、水田跡は、火山灰で覆われていました。そして、火山灰の下から数万個の足跡が発見されています（写真60）。この足跡を分析したところ当時の弥生人の生活が分かってきました。大人から子どもの足跡まであることから、水田稲作の作業は家族みんなで行っていたのではないかと考えられています。

出土している遺物は、炭化米や弥生式土器のほかに、石器、木製品などが発見されています。弥生式土器は、縄文土器と同じように縄文の文様が付けられていますが、「田舎館式土器」と呼ばれています。石器は、北方系の技術で作られている石斧が発見されています。また、木製品は、仙台平野から発見されている鍬と似ている木製農具が一点発見されています。この木製品は、柄杓の柄にクマの頭が彫刻されています。

垂柳遺跡では、約二一〇〇年前に稲作が始まりますが、この頃から気候変動が始まります。それは、降水量の増加と低温化です。これが原因で垂柳遺跡は洪水に遭い、水田は厚い土砂に覆われてしまいました。そのため、この当時の水田跡が保存されていました。

（三）砂沢遺跡

岩木山の東側山麓に砂沢溜池があります。砂沢溜池は、江戸時代に造られた水田の灌漑用のため池です。そして、砂沢溜池は江戸時代から土器や農具などが発見されることで知られていました。昭和四十年代以降には頻繁に土取りが行われるようになり、遺跡が破壊される恐れがあることから昭和五十九年度から昭和六十三年度まで発掘調査をすることになりました。

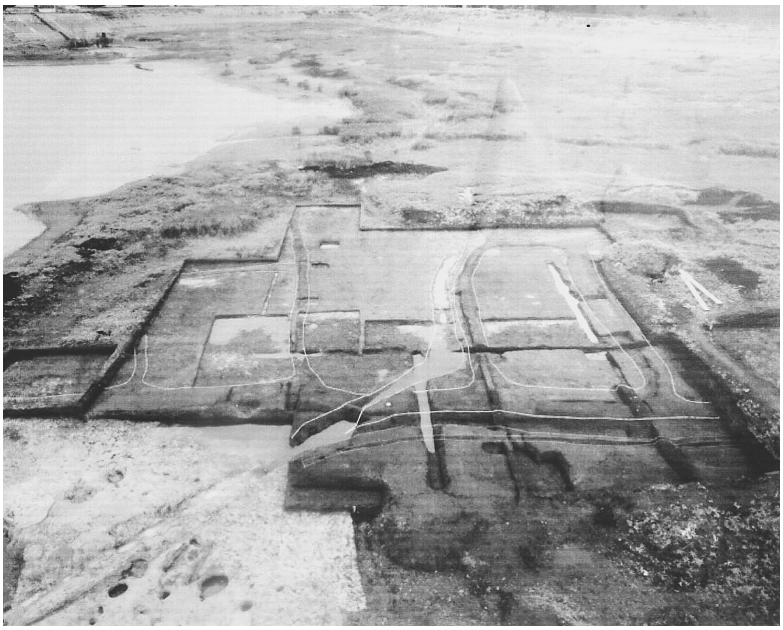

写真61　砂沢遺跡・水田跡

発掘調査の結果、遺構は、縄文時代の竪穴住居跡四軒、弥生時代の水田跡六枚（写真61）、水路状溝八本、溝状遺構二本、土坑跡四基などが、遺物は、縄文土器、弥生土器、土製品、石器、石製品などが発見されています。砂沢遺跡の年代は、今から二三〇〇年前の弥生時代前期です。

砂沢遺跡から発見された水田跡六枚は、垂柳遺跡より古く、約二三〇〇年前の弥生前期の水

写真62　砂沢遺跡・出土した土器

田跡です。一枚の水田は、長軸は十一m、短軸は五mの大きさで、垂柳遺跡から発見された水田より大きいのが特徴です。

出土している遺物のうち、弥生土器は、「砂沢式土器」（写真62）と呼ばれています。砂沢式土器は、縄文時代晩期の終わり頃の土器と弥生時代前期の土器をつなぐ土器です。そのため、土器の表面には、縄文の文様が付けられています。

土製品は、土偶が八十五点、土版が二十四点など発見されています。土偶八十五点の中に結髪形土偶が十二点あります。結髪形土偶とは、土偶の頭の部分に髪を結った文様が付けられており、亀ヶ岡遺跡から出土している遮光器土偶を伝承している土偶のことです。結髪形土偶のうち一点は、高さ二〇・一cm、幅一六・七cm、厚さ四・八cmの比較的大きな土偶です（写真63）。

写真63　砂沢遺跡・土偶

形も美しく整っており、考古学的にも美術的にも貴重な資料であることから弘前市有形文化財に指定されています。

砂沢遺跡で発見された水田跡は、その後の調査で、稲作が行われていた期間は、短期間で十二、三年程度という結果でした。稲作する土地は充分広がっており、また、気候も温暖で安定した時代に、稲作期間が短かった理由はわかっていません。しかし、発見された遺物などから、砂沢遺跡では縄文時代の生活様式が継承されていたため水田稲作は続かなかっただろうと考えられています。

（四）　黒石の弥生時代

黒石市には弥生時代の遺跡は発見されていません。しかし、昭和六十一年に石名坂遺跡を発掘調査した時に弥生土器の破片が発見されています。

また、黒石市に隣接している田舎館村の垂柳遺跡から水田跡が発見されていることから黒石市にも弥生時代の遺跡は存在し、水田は作っていた可能性はあります。

四　弥生文化の伝播（でんぱ）

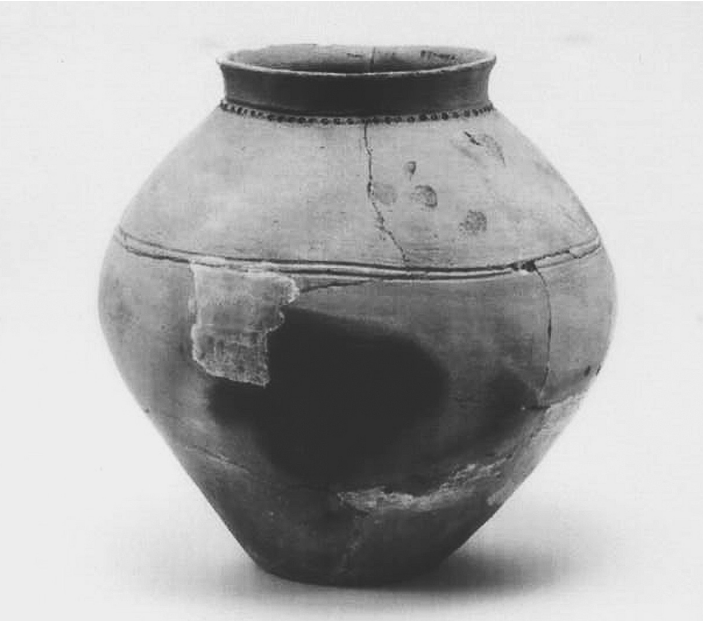

写真64　九州の遠賀川式土器

青森県で発見されている水田跡は、北九州で水田稲作が始まってから約六〇〇年後に東北北部で作られたものです。

九州からどのようにして伝わってきたのでしょうか。九州の遠賀川式土器（おんががわしきどき）（写真64・註一）が、山形県、秋田県、青森県の日本海側から出土しています。遠賀川式土器は九州から西日本まで分布（ぶんぷ）しており、この土器を調査していくと水田の始まりの時期の土器であることがわかりました。また、この土器が日本各地から出土してい

ることから、水田稲作が伝わっていく経路も推察することができるようになりました。

青森県では、垂柳遺跡や砂沢遺跡以外では、田舎館村の高樋（たかひ）（三）遺跡（いせき）から水田跡が発見されています。遠賀川式土器が発見されている地域から推定して、水田稲作を伴う弥生文化は、北陸地方、日本海側を伝わって青森県津軽地方まで広がったと考えられています。下北半島や南部地方では、水田跡は今のところ発見されていませんが、弥生土器が発見されていることから弥生文化はあり、水田は作られていた可能性はあります。

また、青森県内では、弥生時代中期以降、水田跡は発見されていません。水田が作られるようになるのは、奈良時代（ならじだい）や平安時代以降（へいあんじだいいこう）です。水田が作られなくなった理由は、垂柳遺跡でも述べたように、前一世紀前後の気候（きこう）変動（へんどう）です。これが洪水（こうずい）を発生させる原因になり、多大な被害があったのだろうと考えられています。

時を隔てて、奈良時代、平安時代の六世紀頃から、再び水田稲作が作られるようになり、大規模な集落が形成されるようになります。その後、津軽地方でも稲作を中心とした生活をするようになり、現在に至っています。

註釈

註一

昭和六年に福岡県遠賀川下流の立屋敷遺跡から弥生式土器が出土しました。この土器は、胴部が張り出しており、胴部上半にはへらや貝殻で羽状文や鋸歯文などが付けられていますが、胴部には文様が付けられておりません。このような土器は、「遠賀川式土器」、あるいは「遠賀川系土器」と呼ばれています。この土器は、九州から西日本まで分布していますが、東北北部でも発見されています。遠賀川式土器を調査していくと、この土器が稲作水田の始まりの時期の土器であることが分かりました。つまり、遠賀川式土器が出土するということは水田稲作も伝わっているということになります。東北地方や青森県内でも遠賀川式土器が出土していることから水田耕作が東北地方まで伝わっていることになります。

写真・図版出典一覧

写真1	E・H・カー「歴史とは何か」	執筆者撮影
写真2	黒石城跡・崖上に黒石城が立地	執筆者撮影
図1	津軽信英肖像画	弘前市正伝寺所蔵より転載
図2	黒石市の位置図	インターネット／白地図専門店を利用し、加工して使用
写真3	八甲田連峰・櫛ヶ峯	インターネット／平川市観光協会から転載
写真4	八甲田連峰・大岳	執筆者撮影
写真5	浅瀬石川と岩木山	執筆者撮影
写真6	発荷峠展望台から十和田湖を展望・奥に八甲田連峰の横岳・櫛ヶ峯・駒ヶ峰	インターネット／小坂町観光産業課から転載
図3	黒石市山形地区遺跡分布地図	青森県教育庁文化財保護課所蔵より改変・転載
写真7	岩木川	執筆者撮影
写真8	赤坂遺跡発掘調査風景	執筆者撮影
図4	人類の進化	三浦順子作画
図5	ラスコーの洞窟壁画・イメージ画	三浦順子作画
写真9	青森の「ヒバ」	東北森林管理局所蔵より転載
写真10	大森勝山遺跡出土・旧石器遺物	弘前市教育委員会所蔵より転載
写真11	大平山元遺跡・風景	外ヶ浜町教育委員会所蔵より転載
写真12	大平山元遺跡から出土した石器と縄文土器	外ヶ浜町教育委員会所蔵より転載
写真13	御子柴型石器	外ヶ浜町教育委員会所蔵より転載
写真14	大平山元Ⅱ遺跡から出土した石器の出土状況	外ヶ浜町教育委員会所蔵より転載

写真15　大平山元遺跡から出土した旧石器　世界遺産　縄文遺跡群・大平山元遺跡（註）より転載
写真16　弘前市・大森勝山遺跡　環状列石　世界遺産　縄文遺跡群・大森勝山遺跡より転載
写真17　大平山元遺跡から発見された縄文時代最古の土器　外ヶ浜町教育委員会所蔵より転載
写真18　三内丸山遺跡・クリ　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡より転載
写真19　黒石市地蔵沢遺跡から出土したクリ　黒石市教育委員会所蔵より転載
写真20　八戸市丹後谷地から出土したきのこ型土製品　八戸市教育委員会所蔵より転載
写真21　つがる市田小屋野貝塚　つがる市教育委員会所蔵より転載
写真22　三内丸山遺跡・竪穴住居跡　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡より転載
写真23　八戸市南郷地区畑内遺跡出土土器　八戸市教育委員会所蔵より転載
写真24　三内丸山遺跡から出土した石鏃　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡より転載
写真25　縄文の学び舎・小牧野館の展示・縄文時代の丸木舟（復元）　青森県観光国際戦略局観光企画課所蔵より転載
写真26　亀ヶ岡遺跡・遮光器土偶　国立文化財機構所蔵品統合検索システムより転載
写真27　三内丸山遺跡・出土土偶　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡より転載
写真28　亀ヶ岡遺跡・土壙墓跡　世界遺産　縄文遺跡群・亀ヶ岡遺跡より転載
写真29　青森市小牧野遺跡・環状列石　世界遺産　縄文遺跡群・小牧野遺跡より転載
図6　縄文人・イメージ　三浦順子作画
写真30　三内丸山遺跡・遠景　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡より転載
写真31　三内丸山遺跡・復元された大型掘立建物跡　六本柱　執筆者撮影
写真32　三内丸山遺跡・復元された大型竪穴住居跡　執筆者撮影
写真33　三内丸山遺跡・土器の出土状況　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡より転載
写真34　三内丸山遺跡・翡翠の玉製品　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡から転載

写真35　三内丸山遺跡・ヒラメの骨　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡から転載
写真36　三内丸山遺跡・オニグルミ　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡から転載
写真37　縄文時遊館　執筆者撮影
図7　花巻遺跡位置図　インターネット／奈良文化財研究所、地理院タイル
写真38　花巻遺跡・竪穴住居跡　黒石市教育委員会所蔵から転載
写真39　花巻遺跡・石棺墓　黒石市教育委員会所蔵から転載
写真40　花巻遺跡・土器囲い炉　埋設状況　黒石市教育委員会所蔵から転載
写真41　花巻遺跡・フラスコ型土壙跡　黒石市教育委員会所蔵から転載
図8　フラスコ型土壙跡の断面形・イメージ図　執筆者作図
図9　菅江真澄肖像画　秋田県立博物館所蔵写本から転載
図10　菅江真澄がスケッチした花牧の瓦やこがめ　弘前市教育委員会所蔵から転載
写真42　佐藤部　弘前市教育委員会所蔵から転載
写真43　工藤彦一郎　世界遺産　縄文遺跡群・三内丸山遺跡から転載
写真44　三内丸山遺跡・円筒土器　黒石市教育委員会所蔵から転載
写真45　佐藤雨山　インターネット／奈良文化財研究所、地理院タイル
図11　一ノ渡遺跡位置図　青森県埋蔵文化財調査センター所蔵から転載
写真46　一ノ渡遺跡・祭壇として使用された組石遺構　青森県埋蔵文化財調査センター所蔵から転載
写真47　一ノ渡遺跡・立石遺構　青森県埋蔵文化財調査センター所蔵から転載
写真48　一ノ渡遺跡・硬玉製大珠　青森県埋蔵文化財調査センター所蔵から転載
図12　石名坂遺跡位置図　インターネット／奈良文化財研究所、地理院タイル
写真49　青森県立郷土館・風韻堂コレクション・石名坂遺跡出土遺物一部　青森県立郷土館所蔵から転載

写真40	石名坂遺跡・注口土器2点	黒石市教育委員会所蔵から転載
図13	長坂遺跡位置図	インターネット／奈良文化財研究所、地理院タイル
写真51	長坂遺跡・甕棺土器	黒石市教育委員会所蔵から転載
図14	長坂遺跡・切断蓋付土器・出土状況平面図・土器実測図	黒石市教育委員会所蔵から転載
図15	長坂遺跡・皿型土器実測図	黒石市教育委員会所蔵から転載
図16	弥生町遺跡位置図	インターネット／奈良文化財研究所、地理院タイル
図17	「漢委奴国王」の印	三浦順子作画
図18	卑弥呼・イメージ画	三浦順子作画
写真52	卑弥呼の墓と推定されている箸墓古墳	桜井市教育委員会から写真提供
図19	弥生時代の食事・イメージ	インターネット／弥生ミュージアから転載
写真53	吉野ヶ里遺跡・主祭殿	吉野ヶ里公園管理センター所蔵から転載
写真54	弥生時代竪穴住居跡・八戸市牛ヶ沢（4）遺跡	八戸市教育委員会所蔵から転載
写真55	田舎館式出土遺物	田舎館村教育員会所蔵から転載
図20	石包丁使用方法	インターネット／弥生ミュージアから転載
写真56	弥生時代・石包丁	インターネット／弥生ミュージアから転載
写真57	滋賀県琵琶湖底から発見された銅鐸	国立歴史民俗博物館より写真提供
図21	聞く銅鐸・見る銅鐸『日本最大と最小の銅鐸　大岩山と近江の銅鐸』から転載	インターネット／大岩山と近江の銅鐸から転載
図22	縄文人（左）と弥生人（右）・イメージ像	三浦順子作画
写真58	昭和33年の垂柳遺跡発掘調査風景	田舎館村教育委員会所蔵から転載
写真59	田舎館村垂柳遺跡・水田跡	田舎館村教育委員会所蔵から転載
写真60	田舎館村・垂柳遺跡・水田跡から発見された足跡	田舎館村教育委員会所蔵から転載

写真61　砂沢遺跡・水田跡　弘前市教育委員会所蔵から転載
写真62　砂沢遺跡・出土した土器　弘前市教育委員会所蔵から転載
写真63　砂沢遺跡・土偶　弘前市教育委員会所蔵から転載
写真64　九州の遠賀川式土器　青森県立郷土館所蔵から転載

註：「世界遺産・北海道　北東北の縄文遺跡群」のアーカイブを利用した場合、出典記載は、「世界遺産　縄文遺跡群・〇〇〇遺跡」と表記します。

参考文献一覧

青森県　『青森県史　資料編　考古一』　平成二十九年三月三十一日
青森県　『青森県史　資料編　考古二』　平成二十五年三月二十九日
青森県　『青森県史通史編Ⅰ　原始　古代　中世』　平成三〇年三月十五日
青森県教育委員会　『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書七十九集　昭和五九年三月二十五日
青森県教育委員会　『垂柳遺跡発掘調査報告書』　青森県埋蔵文化財調査報告書八十七集　昭和六〇年三月三〇日
弘前市教育委員会　『砂沢遺跡』　昭和六十三年三月三十一日
田舎館村教育委員会　『最北の水田跡　垂柳遺跡』　昭和六一年三月
田舎館村教育委員会　『垂柳遺跡（昭和五十六年度遺跡確認調査報告書）』　昭和五七年三月三十一日
黒石市教育委員会　『長坂一遺跡発掘調査報告書』　黒石市埋蔵文化財調査報告・第三集　昭和六十年三月三十一日
黒石市教育委員会　『花巻遺跡』　黒石市埋蔵文化財調査報告・四　昭和六十一年三月三十一日
黒石市教育委員会　『石名坂遺跡』　黒石市埋蔵文化財調査報告・第六集　昭和六十二年三月三十一日
黒石市教育委員会　『花巻遺跡』　黒石市埋蔵文化財調査報告・第七集　昭和六十三年三月三十一日
黒石市教育委員会　『地蔵沢遺跡』　黒石市埋蔵文化財調査報告・第十一集　平成四年三月三十一日

黒石市教育委員会　『地蔵沢遺跡Ⅱ』　黒石市埋蔵文化財調査報告・第十二集　平成五年三月三十一日
黒石市教育委員会　『長坂（一）遺跡』　黒石市埋蔵文化財調査報告・第十五集　平成十一年三月三十一日
エドワード・ハレット・カー　『歴史とは何か』　訳　清水幾多郎　岩波新書　岩波書店　昭和三十七年三月二十日
エドワード・ハレット・カー　『歴史とは何か』　訳　近藤和彦　新版　岩波書店　令和四年五月十七日
御所野縄文博物館編　『環状列石ってなんだ　御所野遺跡と北海道・北東北の縄文遺跡群』　新泉社　平成三十一年三月三十一日
藩祖津軽信英公分知三五〇年記念誌編集委員会　『黒石城下誌』　津軽新報社　平成二十年十月二十二日
橋場弦　・桜井英治　『中学歴史　日本と世界』　山川出版　令和二年三月二十四日
坂上康俊・戸波江二・矢ケ崎典隆　『新編　新しい社会　歴史』　東京書籍　平成二十八年三月三十一日
菅江真澄　『菅江真澄遊覧記　一』　平凡社ライブラリー　平凡社　平成十二年四月十五日
菅江真澄　『菅江真澄遊覧記　二』　平凡社ライブラリー　平凡社　平成十二年五月十五日
菅江真澄　『菅江真澄遊覧記　三』　平凡社ライブラリー　平凡社　平成十二年六月十五日
菅江真澄　『菅江真澄遊覧記　四』　平凡社ライブラリー　平凡社　平成十二年七月十五日
菅江真澄　『菅江真澄遊覧記　五』　平凡社ライブラリー　平凡社　平成十二年八月十五日
藤尾慎一郎　『日本の先史時代　旧石器・縄文・弥生・古墳時代を読みなおす』　中公新書　中央公論新社　令和三年八月二十五日
篠田謙一　『人類の起源』　中公新書　中央公論新社　令和四年二月二十五日
竹倉史人　『土偶を読む』　晶文社　令和三年四月二十四日
望月昭秀他　『土偶を読むを読む』　晶文社　令和五年四月二十八日
山田康弘　『地図でスッと頭に入る　縄文時代』　晶文社　令和三年十二月一日
工藤伸一　『菌蕈研究所研究報告　資料・縄文時代のきのこについて』　日本きのこセンター菌蕈研究所　平成十二年

協力機関及び協力者一覧

「ふるさと読本　「わたしたちの黒石　第八集　旧石器時代・縄文時代・弥生時代」」を刊行するにあたり、左記の各関係機関及び様々な方々からご教示とご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表する次第です。

関係機関

弘前大学人文社会科学部北日本考古学センター・秋田県立博物館・吉野ヶ里公園管理センター・青森県環境生活部・青森県教育委員会・青森県立郷土館・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県三内丸山遺跡センター・青森市教育委員会・弘前市教育委員会・弘前市立博物館・八戸市博物館・八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館・黒石市教育委員会・五所川原市教育委員会・つがる市教育委員会・平川市教育委員会・外ヶ浜町教育委員会・田舎館村教育委員会

個　人

市川健夫・伊藤由美子・内之浦昭・宇庭瑞穂・小笠原雅行・岡田康博・岡本洋・大田原慶子・小保内裕之・柿崎孝治・木戸奈央子・木村高・木村真明・木村那智子・工藤清泰・工藤忍・工藤司・小石川透・駒田透・齋藤岳・齋藤淳・榊原滋高・佐野忠史・篠村正雄・東海林心・杉野森淳子・相馬信吉・関根達人・瀧本学・高橋真由美・高柳薫・田坂里穂・中園裕・永嶋豊・長尾智寿・中田書矢・成田滋彦・羽柴直人・藤原弘明・三上佳蓮・三河茉依・安田弘（敬称略）

最後に、本書の校正は、黒石市教育委員会　教育長　山内孝行氏、理事兼指導課長　髙木威氏をはじめ、中田伸一氏、田澤康子氏にお願いしました。

また、本書の表紙及びイラストは黒石美術会　会長　三浦順子氏に作成していただきました。

厚く御礼申し上げます。

執筆・編集　黒石市教育委員会　歴史文化専門員　鈴木　徹

ふるさと読本「わたしたちの黒石」第八集
旧石器時代・縄文時代・弥生時代
執筆・編集　黒石市教育委員会
歴史文化専門員　鈴木　徹
発行日　令和六年十月三十一日
発行者　公益財団法人　黒石市民財団
代表理事　對馬　省次
事務局　青森県黒石市青山一二六番地二
電話　〇一七二（五三）〇一五六
印刷所　株式会社　津軽新報社
青森県黒石市前町四十八番地
電話　〇一七二（五二）三一九一